

2024年度 岐阜県委託事業

# 「匠の国ぎふ」の 技を支える相談事業

年次報告書

座談会記録:

「伝統技術の後継者を  
育てる仕組みづくり」



高山陣屋の樽へぎの道具  
「万力」

一般社団法人

匠の環

「匠の国ぎふ」の技を支える相談事業	1
相談窓口（技の環）について	2
（1）相談業務の概要	3
相談業務の事例紹介	4
（2）調査業務の概要	12
（3）広報業務の概要	14
（4）連携業務の概要	16
各種助成金制度等の情報提供	17
評議員会	18
総括	20
座談会「伝統技術の後継者を育てる仕組みづくり」	22

「匠の国ぎふ」の技を支える相談事業

# 現場の課題を解決する 仕組みを創設

岐阜県では、文化財の保存修理や伝統工芸品の製作などに携わる方々の現場の課題解決を支援しています。一般社団法人技の環が県から委託を受けて県内の課題に対して以下の業務を行うほか、技の環が独自に全国からの相談にも可能な限り対応しています。

## (1) 相談業務

- ・伝統技術の現場が抱える「道具」、「原材料」、「後継者」等の技術の継承に関する相談を受け付けます。
- ・相談は、電話、WEBフォーム、メール等のほか、戸別訪問、オンライン面談による聞き取りによって受け付けを行い、内容に応じて適切な助言、情報提供及び関係機関との調整等を行います。
- ・専門的な相談は、必要に応じて専門家の助言を受けて解決に向けた対応を行います。

## (2) 調査業務

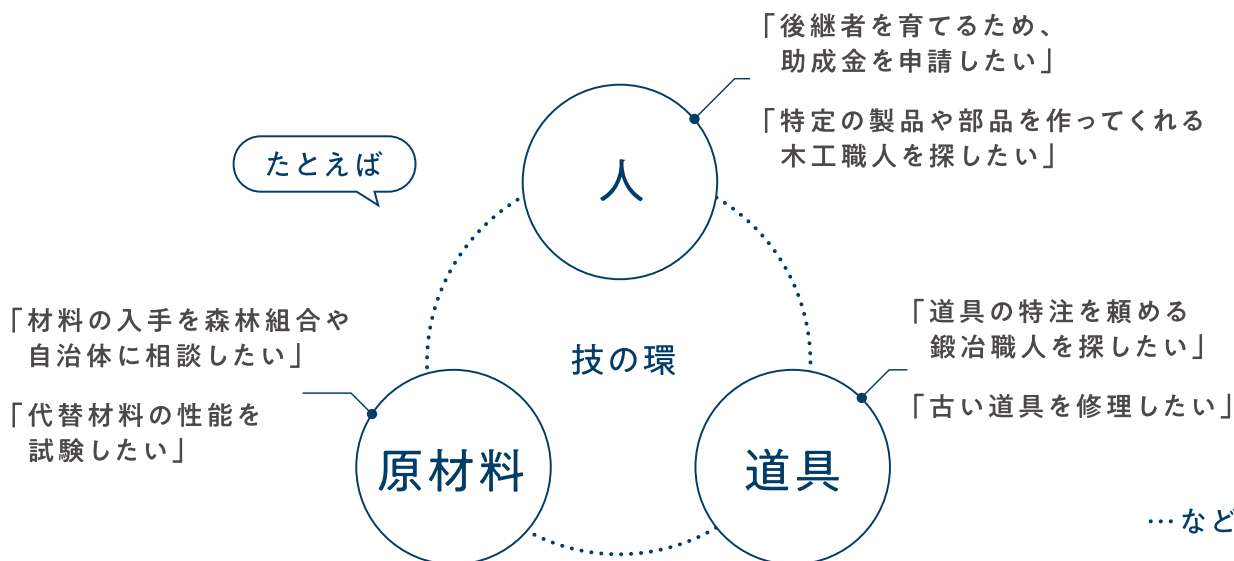
- ・相談業務で受け付けた課題のうち、特に重要なものについて重点的に調査を行います。
- ・2024年度は、国指定史跡「高山陣屋」の屋根板（樽板）の生産に必要な5種類の道具（大割鉋、万力、鎌、側鉋、銚）を県内の鍛冶職人に依頼して製作し、性能を確認しました。

## (3) 広報業務

- ・技の環のウェブサイト、刊行物、Instagram、Facebook、X、Youtubeなどを通じて、技の環の活動の情報発信を行います。
- ・伝統技術に関するイベントなどを行います。

## (4) 連携業務

- ・年1回、岐阜県関係課（文化伝承課・地域産業課・林政課）、関係市町村、関係民間団体等が参加する連携会議を開催します。
- ・文化庁及び関係機関等と適宜情報交換を行います。



# 一般社団法人 技の環 設立の経緯

伝統工芸品の製作や文化財の保存修理。こうした伝統的なものづくりに関わる技術を、私たちは総称して「伝統技術」と呼んでいます。伝統技術の現場はいま、様々な課題を抱えています。需要は減り、後継者は少なく、原材料や道具は手に入りづらくなりました。このままでは地域が誇る伝統技術は消滅してしまいかねません。これらの課題を現場の職人が自ら解決するのは無理があります。一方、地方自治体や国がそれぞれの現場をきめ細かく把握して対策を取れるわけではありません。そこで現場の職人と様々な関係者・支援者・行政機関をつなぎ、課題解決の支援を行う中間支援組織が必要になります。

岐阜県では2019年度から「『匠の国ぎふ』を支える道具の保存伝承事業」を通じて現場の課題を調べてきた結果、こうした中間支援組織が求められていると考え、調査メンバーが中心となって2024（令和6）年2月に一般社団法人 技の環を設立しました。技の環という言葉には、伝統技術の現場を支え、人と人をつなぎ、環をつくる、私たちがそのハブ役になるという意味が込められています。

## 事業内容

伝統技術の継承および原材料・道具に関わる  
以下のような事業を行います。

- |                   |                       |
|-------------------|-----------------------|
| (1) 課題解決の支援       | (5) 記録                |
| (2) 調査研究          | (6) 社会への普及啓発          |
| (3) 資料の収集         | (7) 国内外の団体等との連携       |
| (4) 研修会及び講習会の企画運営 | (8) 図書及び映像の出版、販売並びに頒布 |

## スタッフ

### 久津輪 雅 代表理事

岐阜県立森林文化アカデミー教授（木工）。長良川鶴飼用具を作る職人の後継者育成や岐阜和傘の材料確保の活動を支援。

### 村田 明宏 理事

工芸技術研究所代表。旧岐阜県工芸試験場研究員、岐阜県工業技術研究所所長などを歴任。NPO法人飛騨漆の杜プロジェクト副理事長、伝統工芸品産業、刃物産業、漆工技術などに知見を持つ。

### 大滝 絢香 理事

2019～2023年度まで岐阜県文化伝承課「匠の技を支える道具の保存伝承事業」調査員として、聞き取り調査、報告書作成、データベース化などを担当。

### 蓑谷 百合子 理事

工芸コーディネーター、風光ル店主。工芸品の商品開発やコーディネート業務の傍ら飛騨地産漆の再生に取り組む。NPO法人飛騨漆の森プロジェクト理事。



久津輪 雅、大滝 絢香、蓑谷百合子、村田明宏

## (1) 相談業務の概要

1年間で116件の  
相談に対応

2024年4月から2025年3月末までに、合計116件の相談を受け付け、対応を行いました。1件の相談に対して継続的に複数回対応を行っているものは、その都度件数をカウントしています。

相談者区分では、職人からの相談が最も多くなり、企業・団体からの相談が続きました。職人からは人(後継者)、原材料、道具のあらゆる分野に関する相談がありました。企業・団体からは後継者の育成に関して、研修先を仲介してほしいという依頼や、親方と弟子の間に入ってサポートしてほしいという依頼などがありました。

相談者の地域では、スタッフが美濃窓口と飛騨窓口にいることもあり、中濃地域、飛騨地域、岐阜地域の順に多くなりました。一方で、東濃地域や西濃地域からの相談は少なく、特に木工や陶芸の事業所が多い東濃地域では訪問や調査を増やすなど、認知度を高める必要があります。

相談方法では、対面による相談が最も多くなりました。これは、スタッフが日頃から伝統技術の職人たちと接する中で課題を直接聞き取っているためです。

分類別では、原材料に関することが最も多く、次いでその他・全般、人(後継者等)、道具と続きました。

技の環のスタッフは、これまで和傘、鶴籠、鶴舟、道具鍛冶、飛騨春慶、漆などの伝統工芸に関わっており、人脈や知見があるため、それらの工芸分野に関する相談が多く寄せられました。

## | 2024年4月～2025年3月までの実績

相談者区分	
職人	52
道具生産者	0
原材料生産者	6
仲介者	5
一般	1
市町村	14
学校	2
企業・団体	32
報道関係	1
その他	3

相談方法	
電話	18
メール・ウェブ	26
対面	64
その他	8

相談件数(分類別)	
道具	16
原材料	38
人(後継者等)	23
その他・全般	39

相談者の地域	
岐阜地域	21
西濃地域	2
中濃地域	38
東濃地域	4
飛騨地域	26
県全域	5
県外	20

相談のステージ	
1(面会)	9
2(課題聞き取り)	48
3(対応実施)	59

4月からの累計	116
---------	-----

## 人に関すること①

# 職人と研修生の関係改善

### 状況

ある伝統工芸の職人のもとに2022年から後継者をめざす研修生が1人入った後、2年ほど経ったところで職人と研修生の関係が悪くなってしまい、業界団体の職員から技の環に対してサポートの依頼がありました。

この職人の工房には後継者がいなかったため、業界団体が後継者候補を見つけ、クラウドファンディングで集めた資金などを活用して3年間の研修を行っています。職人は膨大な知識と技術を持っているものの教え方が分からず感情的になってしまうことがあり、一方で研修生はそれらの知識や技術をすべて1人で受け継ぐことができるのか、途方に暮れてしまっている状況でした。また、技術指導すべき項目を定めていなかったり、顧客からの注文にその都度対応してしまうために、研修が予定通りに行われないなどの問題がありました。

### 対応

- ①技の環スタッフ2人が職人、研修生から個別に聞き取りを実施しました。
- ②技の環から業界団体へ、聞き取りの報告および研修の改善提案を文書で提示しました。
- ③技の環スタッフ、業界団体スタッフ、職人、研修生が集まり、改善提案について検討を行いました。
- ④職人と研修生の双方が、研修内容を自己評価する評価シートを導入し、定期的に技の環スタッフが確認を行いました。
- ⑤研修を優先し、顧客へは納期をずらすなどの対応を職人に依頼し、了解を得て実施してもらいました。
- ⑥当初は2週間に1度のペースで、技の環スタッフ、業界団体スタッフ、職人、研修生が集まり、状況を確認しました。



技の環が相談に乗っている、ある伝統工芸の職人の手

### 現在の進捗

技の環スタッフが個別に面談を行っただけで、職人、研修生の双方ともかなり気持ちが落ち着いたようでした。業界団体スタッフも含めて研修内容を整理し、定期的にフォローアップすることで、状況は少しずつ改善しています。2025年度も継続してサポートしていきます。

伝統工芸の現場では、親方と弟子が工房内で1対1の関係になることが多いため、人間関係の問題が起きることがあります。今回はこうした課題への対応に実績のある、東京都荒川区立荒川ふるさと文化館の野尻かおる学芸員にお話を伺い、参考にさせていただきました。

## 人に関すること②

# 他県の産地への研修生の派遣仲介

### 状況

関市の貝印株式会社では、鍛造技術を活かした包丁などの製品づくりのため、子会社社員を高知県の鍛冶職人育成施設へ派遣したいと考えました。そこで同社から技の環に対し、派遣の仲介依頼がありました。

関市は刃物の町として知られますが、工業製品を作るメーカーと日本刀を作る刀鍛冶に二極化していて、鉄を叩いて包丁や小刀などの道具を作る鍛冶職人はいません。一方、高知県は鍛造技術で知られる産地で、後継者育成のために2019年度に経産省の補助金等を活用して「鍛冶屋創生塾」という鍛冶職人育成施設を開設しています。鍛冶屋創生塾は2年制で、高知県の後継者育成のための施設なので、他県に就職する研修生の受け入れは行っていませんでした。

### 対応

- ①技の環スタッフが貝印役員、子会社社員に面談を実施しました。
- ②技の環から鍛冶屋創生塾の事務局長へ受け入れを打診しました。
- ③鍛冶屋創生塾、高知県、香美市が協議の結果、2週間の短期なら受け入れ可能との返事をいただきました。
- ④10月下旬から2週間、貝印子会社が社員を鍛冶屋創生塾へ派遣しました。
- ⑤技の環スタッフと貝印役員が現地を訪問し、高知県、香美市、鍛冶屋創生塾と、今後の産地間連携について協議を行いました。



高知県の鍛冶屋創生塾で焼入れ作業をする貝印の子会社社員



研修で製作した包丁

### 現在の進捗

技の環としては、高知県に研修生を受け入れてもらうだけでなく、岐阜県と高知県の双方にメリットがあるような関係構築につながるよう、仲介を行いました。高知県側が将来の産地間連携に関心を持ってくれたことから、2週間の短期の受け入れが実現しました。

子会社社員は10月下旬に2週間、鍛冶屋創生塾に派遣され、鎌や包丁などの鍛造技術を学びました。さらに2025年4月からは高知県の別の打刃物製造業者のもとで、2年間の長期研修も決まりました。この長期研修の受け入れも、技の環スタッフと貝印役員が共に現地を訪れ、相談した上で実現したものです。

# 原材料に関すること①

## 曲物用のヤマザクラの樹皮

### 状況

飛騨春慶の木地や、蒸し物料理に使うせいろなどの曲物製品には、板の端を綴じるのにヤマザクラ、オオヤマザクラ、カスミザクラなどの樹皮が使われます。岐阜県内の曲物職人は、秋田県の産地から仕入れたり、奈良県へ買い付けに行ったりしていますが、価格が高騰する一方で質が下がっていることから、県内での調達の可能性を探っています。

奈良県の業者は、本来は吉野本葛用の葛根を収穫するついでに、ヤマザクラの樹皮も採取しています。この業者のもとに日本全国の曲物職人が樹皮を買い付けに訪れているのですが、職人は80代で今後も持続的に樹皮が得られるかどうかは分かりません。

### 対応

- ① 技の環から、高山市で林業・製材等を行う奥飛騨開発株式会社を曲物職人に紹介しました。
- ② 曲物職人が奥飛騨開発に樹皮の採取について相談に行き、技の環スタッフも同行しました。
- ③ 曲物職人が奥飛騨開発を再び訪問し、樹皮を採取しました。
- ④ 技の環スタッフが岐阜市内にヤマザクラの密生地を見つけ、地権者である岐阜市に採取の可能性を打診しています。



奥飛騨開発に相談に訪れた曲物職人たち



せいろに使われているヤマザクラの樹皮

### 現在の進捗

奥飛騨開発株式会社では、次年度も樹皮採取用にヤマザクラの丸太を確保してくれるそうです。ただし伐採後にすぐむかないと固くむきづらくなってしまうため、迅速な連絡と行動が必要になります。

また、岐阜市内にヤマザクラの密生地を見つけ、地権者である岐阜市に採取の可能性を打診中です。

樺細工産地の秋田県仙北市では工芸用にオオヤマザクラを30万本植栽してきた実績があることから、岐阜県でエゴノキプロジェクト(美濃市)や飛騨漆の森プロジェクト(高山市)などの植栽地にヤマザクラの苗を植える活動を行ってはどうかという提案も行いました。それらの植栽地はシカ防護柵で覆われており、獣害の心配がないためです。

2025年度も引き続き県内での採取、育成の可能性を探っていきます。

## 原材料に関すること②

### 和傘用のマダケ

#### 状況

岐阜和傘に用いられるマダケは岐阜県内で収穫されていますが、これまで流通経路が明らかになっていませんでした。県内の傘骨職人から、今後も持続的に供給が維持されるかどうか、流通の状況を調査してほしいとの依頼がありました。日本全国では10か所以上で和傘が作られています、大半の和傘職人は岐阜から傘骨を購入しているため、岐阜の竹の流通の問題は全国に影響を及ぼします。

#### 対応

- ① 技の環スタッフが、岐阜市柳津町の竹問屋・皆安を訪ね、皆本實美社長に聞き取り調査を行いました。
- ② 技の環スタッフが、富加町の竹の切り子・岡勝己さんを訪ね、聞き取り調査を行いました。
- ③ 技の環スタッフが、全国竹の大会(滋賀県近江八幡市)に参加し、流通状況を調査しました。



岐阜市の竹問屋・皆安の皆本實美さん



切り子の岡勝己さん



岡さんのノコギリとナタ

#### 現在の進捗

岐阜県内には岡さんを含めて3人の切り子が存在することが分かりました。しかし、問屋の皆本さんは77歳、岡さんは83歳、あと2人の切り子は60歳代で、今後も流通が維持されるかどうかは分かりません。

一方、全国的に切り子が少なくなっていることから、皆安からは和傘用だけではなく、鳥根県の出雲大社や、石川県の加賀鳶はしご登りで使われる竹なども供給しています。竹を使う文化が途絶えないよう、竹の伐採や流通を必要に応じて支えられるような仕組みを考える必要があります。森林文化アカデミーなどの林業系教育機関や、里山整備を行う森林組合などとも連携が必要です。

# 道具に関すること①

## 鉋用の鋼の成分分析

### 状況

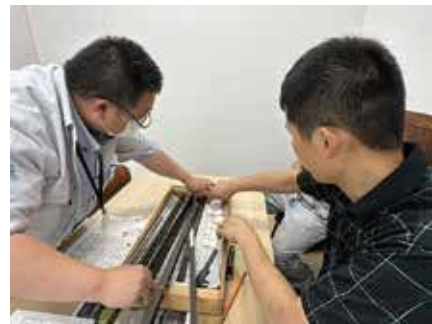
大工や木工職人が使うノミや鉋は、兵庫県や新潟県など、他県の打刃物産地で作られています。技の環スタッフは5月に兵庫県を訪れ、鍛冶職人、三木市の市役所職員、工業協同組合役員などから課題の聞き取り調査を行いました。その際に鉋鍛冶職人から「いろいろな種類の鋼材を所有しているが、焼入れなどの熱処理をする際に成分が分かっていると、処理がしやすい。しかし成分分析ができる公的機関が兵庫県にはない」との課題を聞きました。

### 対応

- ①技の環スタッフが、岐阜県産業技術総合センター（関市）技術支援部専門研究員に確認し、他県からでも依頼試験を受け入れ可能であることを確認しました。
- ②兵庫県の鉋鍛冶職人がセンターを訪れ、1回目の成分分析試験を依頼しました。その際に技の環スタッフが立ち会いました。分析結果はセンターから鉋鍛冶職人へ郵送されました。
- ③鉋鍛冶職人から技の環スタッフへ、2回目の成分分析試験用の鋼材が郵送され、技の環スタッフが代理でセンターへ持参しました。
- ④2回目の分析結果がセンターから鉋鍛冶職人へ郵送されました。



岐阜県産業技術総合センター（関市）



分析を受け付ける研究員（左）と兵庫県の鉋鍛冶職人

### 現在の進捗

依頼試験はセンターを訪れて対面で手続きをする必要があるため、1回目は兵庫県から鍛冶職人に来てもらい、技の環スタッフも同席して手続きを行いました。1回目の結果判明後さらに試験を依頼したい鋼材があるということで、2回目は技の環スタッフが手続きを代行しました。2回目の試験も終了し、鍛冶職人からは謝意が伝えられました。

技の環設立前に実施した全国の打刃物産地の調査では、かつては全国利器工匠具工業連合会のような産地をつなぐ組織があったものの現在は活動しておらず、産地間連携があまり行われていないことを知りました。今回のように岐阜県が得意とする分野で他県の打刃物産地とつながりを持ち、いずれは岐阜県がハブ役となり技術交流や後継者育成などに発展させられればと考えています。

### その他、道具に関することでは・・・

- ・研ぎ台を新調したいので、木工職人を紹介してほしい（日本刀研師）
- ・刃物づくりのワークショップを行うので、柄を作る木工所を紹介してほしい（刃物メーカー）
- ・日光東照宮に納める塗師屋包丁の鞘を特注したい（鍛冶職人）
- ・・・などの相談を受け、県内の木工所や鞘師につながりました。

# その他・全般に関すること①

## 関伝日本刀の職人への聞き取り調査

### 状況

関市は日本刀の刀匠、鞘師、白銀師、柄巻師、研師、塗師の外装研磨技能職人が集い、一地域で一貫生産ができる全国でも稀有な産地です。しかし、後継者の育成や原材料の調達などについて様々な課題があることが分かり、技の環では2023～24年度の重点テーマとして、関伝日本刀のすべての分野の職人に聞き取り調査を行ってきました。

### 対応

- ①技の環スタッフが関伝日本刀の刀匠(10人中8人)、外装研磨技能職人(22人中14人)から聞き取りを実施しました。
- ②2024年7月、職人有志、関市文化課、岐阜県文化伝承課に呼びかけ、聞き取りした課題を共有するミーティングを実施しました。
- ③課題について、関伝日本刀鍛錬技術保存会と技の環が共同で関市に要望書を提出し、課題解決に取り組むことにしました。
- ④2025年1月、ふたたび職人有志、関市文化課、観光課、技の環でミーティングを行い、要望書の中身を検討しました。
- ⑤2025年5月の関伝日本刀鍛錬技術保存会理事会、総会です承を得ることにしています。



職人有志、関市文化課、岐阜県文化伝承課などとのミーティング(7月)

### 現在の進捗

2回にわたるミーティングでは、①原材料(特に松炭)の不足や価格高騰への対応、②後継者育成への支援の拡充、③市民(特に子ども)への普及啓発活動に対する支援、④関鍛冶伝承館の設備改善、スタッフの拡充、⑤関市役所内の部署の一元化(現状では文化課と観光課が分担)、などの要望が挙がっています。なるべく多くの職人から意見を汲み取り、要望書に反映させていく予定です。

## その他・全般に関すること②

### 鶺鴒籠製作の作業場探し

#### 状況

岐阜市の長良川鶺鴒や関市の小瀬鶺鴒で使われる鶺鴒籠を作るNPO法人グリーンウッドワーク協会・竹部会は、美濃市が管理する女性商工会館を賃借して作業場としてきました。しかし美濃市役所から建物が老朽化したため2025年度末で閉鎖したいと連絡を受け、代替りの作業場を探す必要性に迫られています。作業場には、30畳ほどの広さがあり、10人ほどの竹細工教室を開けること、道具類や長さ4～5メートルの竹を200本ほど保管できること、冷暖房があり季節を問わず作業できること、などの条件があります。

#### 対応

- ①11月、美濃市産業課から竹部会への説明時に、技の環スタッフが同席しました。
- ②12月、岐阜新聞の技の環の連載記事で、本件について紹介しました。その後、いくつか情報が寄せられました。
- ③1月、岐阜市文化財保護課、関市文化課、岐阜県文化伝承課を作業場に招き、情報共有と対策検討のためのミーティングを開催しました。



NPO法人グリーンウッドワーク協会・竹部会



職人、岐阜市文化財保護課、関市文化課、岐阜県文化伝承課の職員が集まり、情報共有と対策検討のミーティングを開催

#### 現在の進捗

職人たちが働きやすい作業場の条件がいくつかあることから、まずは竹部会のメンバー自身で物件を探してみることに、岐阜市役所、関市役所からも市内で良い物件があれば竹部会に情報提供をすること、などを確認しました。

また「鶺鴒用具作製に関わる竹細工技術」は関市の無形民俗文化財に指定されていることや、竹部会が長良川以外の他県の鶺鴒籠製作も担っていることから、これを県指定、国指定へ格上げする検討をしてはどうかという提案を技の環から行いました。

その後、2026年度以降もしばらくの間、この建物を使い続けることができることになり、市と竹部会との間で詳細を詰めているところです。しかし中長期的には、新しい作業場を探す必要も出てきます。

## その他・全般に関すること③

### 中学生のフィールドワークへの対応

#### 状況

高山商工会議所から飛騨窓口に、中学生たちのフィールドワークを受け入れてほしいとの相談がありました。高山市内のある中学校の「高山SDGs研修」という授業科目で、特に「伝統工芸（飛騨春慶・祭屋台など）を守り続けるための取り組み」について調査したいとのことでした。

#### 対応

- ①11月、技の環の飛騨窓口スタッフが、技の環の事務所（ギャラリー風光ル）で中学生12人を受け入れました。飛騨春慶や樽へぎ板の実物を見せ、飛騨春慶や樽へぎの技法について、スライドや動画で解説を行いました。
- ②後日、中学生たちからレポートをいただきました。



技の環事務所を訪れた中学生たち



中学生たちからのレポート

#### 現在の進捗

当日は中学生たちから、SDGsにおける伝統工芸・技術の役割や、若い世代への継承の課題、技の環の活動に対する思いなど、多数の質問がありました。飛騨では、SDGsという言葉が生まれるずっと以前から人々が助け合い、自然と共生してきた歴史があること、現在は技術や素材、道具までも継承の危機なので、ぜひ工芸品を大切に使うことを実践してほしいとお話しました。

後日、中学校から研修レポートをお送りいただきました。

「“最高”を受け継ぐことが、本物の伝統を守り続けることに繋がる」

「伝統文化をこれからも守っていくには、“知る”ことが大切」

など、技の環スタッフの説明に対して自分たちができることを考え、提案してくれていました。

技の環は職人と行政や専門家をつなぐ中間支援組織としてスタートしたので、技の環自身が伝統技術の「語り部」としての役割を担うことは想定していませんでした。こうした役割をご提供いただけたことをありがたく思っています。

# 高山陣屋の榑へぎ道具を 岐阜県内の鍛冶職人の手で製作

「匠の国ぎふ」を支える相談事業では、相談業務で受け付けた課題のうち、特に重要なものについて重点的に調査を行います。2024年度は、国指定史跡「高山陣屋」の屋根に用いる榑板(くれいた)の生産に必要な5種類の道具-大割鉋(おおわりなた)、鎌(かま)、側鉋(そばなた)、万力(まんりき)、銚(せん)-を県内の鍛冶職人に依頼して製作し、性能を確認しました。このテーマを選んだのは、これらの道具の中に飛騨独特の形状を持つものがあること、手道具で丸太を割って屋根板を作るのが「匠の国ぎふ」を象徴する技術であること、県内の伝統技術の継承に必要な道具を県内に残る鍛冶職人の手で作ることができるのかを検証したかったこと、などが理由です。

また、2024年度は岐阜県で国民文化祭(清流の国ぎふ文化祭2024)が開催されるのに合わせ、2019年度から5年間にわたって県で実施してきた「匠の技を支える道具の保存伝承事業」の成果を発表する展示やイベントを県と技の環で共催することになったため、それらの展示やイベントを想定したテーマとしました。

## Ⅰ 調査の手順

- ①高山陣屋主任営繕手の松山義治さん、高山陣屋榑へぎ技術研究会代表を務めた宮大工の川上舟晴さんに聞き取り調査を実施し、実際の榑へぎ作業を見学しました。
- ②関市最後の道具鍛冶職人のもとで修業した佐野元治さんに聞き取り調査を実施しました。佐野さんとともに川上さんの工房を訪ね、道具と作業風景を見学してもらいました。
- ③佐野さんに5種類の道具の試作を依頼しました。(協力:貝印株式会社 ※佐野さんは貝印の技術顧問を務めています)
- ④試作した道具を川上さんに預け、試用と性能評価を依頼しました。
- ⑤川上さんの評価と改善すべき点の指摘に基づき、佐野さんにイベント用の道具の本製作を依頼しました。
- ⑥イベント用の道具(大割鉋1本 および 万力4本)が完成しました。



高山陣屋の米蔵 大量のへぎ板が見える



高山陣屋の榑へぎ道具 上から大割鉋、万力、側鉋、鎌、銚



川上舟晴さんの作業を見る、鍛冶職人の佐野元治さん



大割鉈を作る鍛冶職人の佐野さん

## 調査により明らかになったこと

- ・大割鉈、万力、鎌の3種類は、刃を木槌で木材に叩き入れた後にこじる(ねじる)ため、剛性と靱性という相反する性能が求められます。そのため、鋼材の選択、焼入れの温度、応力を集中させない形状など、加工が非常に難しい道具であることが分かりました。
- ・佐野さんは野鍛冶であり小型の製品が主力であるため、今回の大割鉈のような大型で重い道具を製作するには原材料を新たに調達しなければならず、設備も大物向きではないため体に負担のかかる作り方をしなければならないことが分かりました。
- ・試作品を川上さんに評価してもらったところ、1mm以下のわずかな厚みの差で使い心地に差が出る(厚すぎると刃先が見えづらい)ことが判明しました。また、高山陣屋主任営繕手の松山さんによる評価でも、万力の柄を通す穴の角度がわずかに異なり操作性に差が出るとのことでした。これらのことから、特注道具の製作は試作を何度も繰り返す必要があることが分かりました。
- ・大型の道具を得意とする打刃物産地は他県にあり、松山さんや川上さんは実務では他県に発注した道具を使用しています。しかし他県でも道具鍛冶職人は減少しており、将来的には県内で道具を調達する体制も整えておく必要があると考えられます。

## 高山市と関市で「清流の国ぎふ文化祭2024」のイベント・展示を実施

清流の国ぎふ文化祭2024では、高山市と関市でイベント・展示を実施し、成果を発表しました。高山市では飛騨木工連合会主催の「飛騨の家具フェスティバル」会場で、関市では体験交流施設「せきてらす」で、いずれも樽へぎの実演、市民向けワークショップ、道具の作り手と使い手のパネルディスカッション、道具の展示を行いました。

技の環ウェブサイトより、会場で配布した小冊子や上映した動画をご覧ください(次ページにリンクがあります)。



飛騨の家具フェスティバルでの樽へぎの実演

## 各種メディアで情報を発信

### ■ ウェブサイトの開設

2024年4月、技の環のウェブサイトを開設しました。以下のページを設けて随時情報発信を行っています。

- About 技の環について
- Support 匠の国ぎふ課題解決支援業務の概要、お問い合わせの受け付け
- Project 相談窓口に寄せられた中から、優先度・緊急度が高いと認められた課題に取り組んだ事例を紹介
- Archive 過去に実施したプロジェクトの報告書や動画
- Information お知らせ
- Contact ご相談・ご依頼



技の環ウェブサイト  
<https://ginowa.org>

### ■ 刊行物・動画の製作

2024年10月、「清流の国ぎふ文化祭2024」において技の環と岐阜県が開催したイベント「飛騨の匠と関鍛冶の技を継ぐ～高山陣屋の樽へぎ技術の継承と鍛冶職人による道具の製作～」の内容を紹介した動画と小冊子を製作しました。上記のウェブサイトより、ダウンロード・視聴が可能です。



動画(約12分)



小冊子(30ページ)

## ■ 岐阜新聞への連載

2024年4月から、毎月第3土曜日の岐阜新聞文化面にて、「つなぐ 技の環～『匠の国ぎふ』を未来へ～」と題した連載記事を執筆しています。新聞記事は県内の幅広い自治体関係者や伝統技術の関係者に読まれていることが多いため、関係する記事が自治体の議会で取り上げられたり、課題に対する情報提供が寄せられたりする効果がありました。2025年度も連載を継続予定です。

岐阜が誇る伝統技術の継承に危機が訪れている。現場の調査と支援を行う「一般社団法人、技の環」の取り組みについて、代表理事の久津輪健二が報告する。

「一般社団法人、技の環」が4月に手に入らないんです。高山市の木工教育機関の職員が、原因は、県外の自治体職人が減ってしまっただけ、と言った。正直、手ではないういというは、新しい人を育てる。技術が途絶えることを意味する。いま最も危機感を覚えることの一つは、私は岐阜県立森林文化アカデミーで教員を務める傍ら、15年前から県内の文化財や伝統工芸を支える仕事に携わって来た。

岐阜県は、「匠の国」として、東濃地域には、岐阜・中濃地域には紙や鉄、東濃地域は飛騨地域には木の工業を有する、木工の中



つなぐ  
**技の環**  
ぎふ

～「匠の国ぎふ」を未来へ～

①「技の環」誕生 岐阜が誇る伝統に危機

### 匠の技 継承へ中間支援



道具を作る職人の減少などを報告した木工関係者との座談会  
＝2023年3月、高山市大新町の日下祝民館

でも、家具、構材、曲物、機物、自然は皆ゼロメートルから3千メートルまで多岐にあり、目的にかなった素材が得られない。飛騨の匠は1300年前から都の造詣に携わり、その技術現代に受け継がれている。これからは日本の重要な文化財や工業技術で支えていくのは岐阜県の役割だと感じている。しかし、その勢いも技術が危機に陥っている。

まず、後継者を育てる仕組みがない。かつて伝統的な技術は職から子へ、あるいは兄弟関係によって伝えられてきた。戦後、主要な産業にはいわゆる職業訓練校ができたが、たとえば家具製作の学校はあっても構材や曲げっぱの学校はなく、後継者育成は現場に任ざられてきた。いま必要の減少とともに産業が後退している。

公的機関の支援も受けにくい。地方自治体では工業技術士課、文化財は文化財、原材料の工は

林政課が各付持つが、職師で業員が共有されていく。職師は数年前で変わってしまう。さらに県内だけで解決できない課題もある。問題のノミや機のように、木工道具は県外で作られているものがほとんどで、県外の自治体職人を支えなければ岐阜県の木工職人は共倒れになる。

これらの課題について県と匠を重なる中で、「入・原材料・道具の三つの課題にワンストップで対応し、さまざまな関係者をつなぐ」必要だと訴えてきた。そして今年2月に「一般社団法人、技の環」を発足させた。スタッフは代表理事の私を含め美濃地域に2人、飛騨地域に1人、1人、県にも本年度から「伝統技術支援」のポストが新設され、技の環と繋がって伝統技術の現場の課題に取り組む仕組みができた。この連載を通じて、伝統の技が支えられ、環が広がる様子をお伝えできればと思っています。

（久津輪健二、技の環代表理事・森林文化アカデミー教員）

〈第3土曜日に連載〉

くわ・まきし 1987年生まれ、岐阜県立森林文化アカデミー教員、技の環代表理事、NHKアナウンサー、HKTアナウンサー、17年間、高山市木工産業、イギリスで家具職人を修業、現職、著書に「ゴッホの椅子」グリーンウッドワークなど。



岐阜新聞デジタル  
<https://www.gifu-np.co.jp/category/ginowa>

## ■ SNS への発信

2024年4月、技の環の公式Instagram、X、Facebookを開設し、随時情報発信を行っています。開設から2025年3月末までの投稿件数とフォロワー数は以下の通りです。

Instagram  
30件、198人

X  
42件、27人

Facebook  
22件、267人

15

## 岐阜県文化遺産課・地域産業課 林政課・技の環の連携会議

文化財や伝統工芸の課題は行政の複数の部署に関わるため、「匠の国ぎふ」を支える相談事業では、連携会議を年に2回開くことにしています。2024年度は4月23日と2月17日に開催しました。いずれも岐阜県庁において文化遺産課・地域産業課・林政課・技の環の担当者が出席しました。相談事業で4月から2月上旬までに受け付けた相談内容を共有し、下記のピックアップテーマについて意見交換や対応の協議を行いました。

### 原材料の課題

- ・日本刀の刀匠が必要としている松炭の生産を県内で増やせないか。
- ・「伝統工芸や文化財を支える森づくり」を、令和9年度からの「第5期 岐阜県森林づくり基本計画」に盛り込めないか。
- ・企業の森づくりと伝統工芸・文化財の原材料確保の活動をつなげられないか。

### 道具の課題

- ・鍛冶技術の継承に向けた関市や関刃物産業連合会と技の環との協議の経過等を共有。

### その他の課題

- ・県の郷土工芸品の振興について、技の環と連携できることはあるか。
- ・県・市で無形文化財に未指定の伝統技術について、指定を促進してはどうか。
- ・市町村の文化財・伝統工芸担当部局に対して、技の環がサポートできることはあるか。

「伝統工芸や文化財を支える森づくり」については、「第5期 岐阜県森林づくり基本計画」に盛り込むことを林政部内で検討いただくことになりました。他のテーマについても現状を共有し、課題を整理しました。

伝統技術に関わる課題は短時間で解決しないものばかりなので、今後も行政の関係部署と情報を共有しながら課題解決の支援を続けていきます。



2025年2月17日、岐阜県庁内会議室にて（技の環の高山スタッフはオンラインで参加）

各種助成金制度等の情報提供

## 2 件の助成事業や賞への応募を支援

技の環では、伝統技術の継承を支援する助成事業や、表彰する制度についての調査を行い、必要とする現場に情報提供と助言を行っています。2024年度は2件の助成事業や賞への応募に関わりました。

### ■ 明治安田クオリティオブライフ文化財団「地域の伝統文化保存維持費用助成」

高山の樽へぎ技術を伝承する宮大工の川上舟晴さんが、明治安田クオリティオブライフ文化財団の2024年度「地域の伝統文化保存維持費用助成」より、道具製作費として40万円の助成を受けました。これは「清流の国ぎふ文化祭2024」での技の環と岐阜県が共催したイベント「飛騨の匠と関鍛冶の技を継ぐ」において、道具製作に使用されました。



宮大工の川上舟晴さん(右)



助成金で製作した樽へぎの道具

### ■ 第5回 三井ゴールデン匠賞 および オーディエンス賞

技の環代表理事の久津輪が実行委員を務める「エゴノキプロジェクト実行委員会」が、第5回三井ゴールデン匠賞において、選考委員により選ばれる「三井ゴールデン匠賞」、および一般投票により選ばれる「オーディエンス賞」をダブル受賞しました。全国から職人や関係者が集い、和傘材料の持続的な収穫のために森づくりから取り組んでいることが評価されました。



エゴノキプロジェクトの長屋一男実行委員長(中央)、久津輪 雅 委員(右)



# 文化・商工・林業の 専門家による評議員会を実施

2025年3月13日、飛騨高山まちの博物館研修室において、技の環の評議員会を開催しました。文化・商工・林業の各分野の専門家を評議員として招致し、「匠の国ぎふ」の技を支える相談事業で実施した取り組み内容を報告しました。今年度の取り組み内容や来年度以降の活動方針に対して、それぞれの評議員の専門分野の知見やアドバイスをいただくと共に、意見交換を行いました。

## 評議員

今石 みぎわ	(独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所 無形文化遺産部 主任研究員)
河井 隆徳	(一般財団法人伝統的工芸品産業振興協会 常務理事・産地支援部長)
横井 秀一	(造林技術研究所 代表、岐阜県立森林文化アカデミー 特任教授)
梅村 澄夫	(岐阜県産業技術総合センター 所長)
江崎 美穂	(岐阜県環境生活部県民文化局文化伝承課 伝統技術支援監)

### 今石氏

まずは岐阜県が、職人の技術継承を支援する取り組みを始めたこと、そのための予算をしっかりと出したことが英断だと思います。全国的に見てもモデルケースになるほど他に類を見ない取り組みであり、この予算、この人数で、これだけの成果を上げたことが素晴らしいです。それは、岐阜県立森林文化アカデミーをはじめ、それぞれのメンバーが築いてきたネットワークがあったこともこの成果につながっていると感じます。大学等で木材の加工技術や木質資源を研究している研究者もいますので、今後はそういった専門家とも繋がると良いでしょう。

このような活動は立ち上げるのが最初の大きな一歩で、あとはどれだけ持続できるかが鍵となります。この活動が県内や行政内でもしっかりと評価されることも事業継続には必要で、どんどん活動を宣伝すべきです。ウェブサイトでも県の事業であることをもっと前面に出すことで、活動自体の信頼性も上がると思います。

今後を見据えると、技の環の後継者を同時に育てていけるかが大きなポイントになると感じています。また、技の環で行うことの1つ1つが知見となり、ノウハウになると思います。参考にしたい団体や行政が学べるよう、限定公開の形で良いので事例をアーカイブ化し、データベース化することを勧めます。

### 河井氏

まずは技の環の活動の範囲の広さ、その量、エネルギーに感嘆しました。当協会も材料・道具の課題について取り組み始めたところで、大変勉強になりました。県内にとどまらず積極的に宣伝すべき活動だと思います。

当協会では経済産業大臣指定伝統的工芸品の職人を対象に調査を実施していますが、伝統的工芸品の分野とも抱えている課題は共通しています。また、職人支援の補助金や助成金の情報も当協会に集まっていますので、ぜひ当協会とも情報共有はもちろん、調査や活動など連携していければと考えております。

職人と研修者の関係改善の事例が出ましたが、若い職人さんの中にはこのままで良いのかというモヤモヤした気持ちを抱えているものの同業種に若い仲間はなく、課題に対して前向きに話し合う場があまりないという現状があります。情報や悩みを共有することで辛い修業期間を乗り越えられたり、道具の課題を解決したりなどプラスに動くことがあると思います。そのため、当協会でも産地を超えた若い職人の横のつながりを作ろうと思っていまして、そういった職人のつながりづくりを岐阜県の中でも進めていくと良いかもしれません。

横井氏

原材料の相談が多かったとのことですが、山側と繋ぐにあたっては、使う側の職人が求めている材の質やサイズなどの情報もきちんと聞き取ってまとめておくと、相談先を探しやすくなったり、協力を求めやすくなります。事例紹介では曲げわっぱのヤマザクラの樹皮の話がありましたが、適したサイズが分かるとそれに合わせた育て方もできます。松炭も求められる質に合わせて製炭する必要があります。私も林業の分野で調査や育林など手伝えることがありますので、声をかけてもらえたらと思います。

技の環の運営に対しては、他の評議員の方々からご意見が上がった課題を私も感じましたが、今は1年目なのでまずは足元を固めて、県の事業にしっかり取り組むのが良いと思います。その中で他の地域や専門家や団体との繋がりも生まれ、協力体制が築かれていくでしょうし、運営体制も変化していくかと思います。全国的に同じ課題を抱えていて、職人の高齢化や原材料の枯渇など猶予がない課題も多くあります。技の環の活動も県内にとどまらず、全国に広がるのが予測されます。活動を拡大することも見据えながら、取り組んでいてもらえたらと思います。

梅村氏

産業と伝統工芸とでは視点が異なると感じました。例えば、産業では効率化を求めて、自動化を図ることがトレンドです。伝統技術の分野とはそぐわないかもしれませんが、ビジネスを持続させるという観点では、必ずしも職人技にこだわらず自動化を進めたり、工業刃物を使用するというのも1つの考え方かもしれないと思いました。また、岐阜大学と協同組合岐阜関刃物会館が産学連携事業を始めています。人材育成、研究開発、教育の三本柱で行っているのだから、内容によっては協力できるものもあるのではと思います。

初年度で成果を上げていることは素晴らしいのですが、メンバーの専門性や県の事業に依拠しているようにも感じ、技の環の体制がいつまで続くのかということに対して危機感を覚えました。活動を維持するためにも、法人の在り方を含めて体制の見直しや独自の収益事業を興すなど柔軟な視点での運営を検討してみてもいいでしょうか。非常に有意義な活動であるだけに、どう活動を維持するかを今後考えていく必要があるかと思っています。

江崎氏

県が想定していた以上の相談件数や成果を上げたと思います。やはり、相談を直接受けて、専門知識やネットワークを活かしながら随時対応していることが大きいと感じています。

今年度から文化伝承課・地域産業課・林政課・技の環の連携会議を開催しました。これまで関連している相談や課題はその都度担当課に情報提供していましたが、各担当者が一堂に集まることで、情報が生きた声として伝わり、今後の進展のために互いにアイデアを出す話し合いの場となって良い機会でした。三課で始まりましたが、事業を継続する中で、他にも関連する課が出たり、担当する課がまたがる内容も出てくると思いますので、内容に応じて連携会議も柔軟に対応し、拡大していくのが良いと考えています。



# 1年間の活動を振り返って

## 活動の 立ち上げ

初年度は、岐阜県より受託した『「匠の国ぎふ」技を支える相談事業』に専心し、まさしく”駆け抜けた”というのが正直なところですが、件数や取り組んだ事例をどう評価するのは難しい部分がありますが、1つ1つの相談に対し、当法人が有するネットワークや情報を存分に活かして取り組み、初年度としては少人数ながらよくやったのではないかと考えています。スタッフは非常勤ですが、それぞれが立場的に自然と情報が集まってくるようなところで、また、これまで取り組んできたプロジェクト等を通して職人と近い関係を築いてきたことも、この活動の要になっています。

今年度の取り組みに対して各評議員からは、素晴らしい成果を上げていると評価をいただきました。私たちの活動が正しい方向に進んでいることを確認できて、まずは一安心したというところです。初年度で想定以上の成果を上げられたことは、やはり県が伝統技術継承に向けた支援事業を策定し、初年度から約650万円の予算を組んでいただいたということが大きく、県の理解と英断に感謝しています。

## 原材料の 課題

初年度に取り組んだ事例を通して、これから取り組んでいきたい課題や方向性もいくつか見えてきました。まずは、最も相談の多かった原材料の課題ですが、「伝統工芸や文化財を守るための森づくり」というテーマでこれから取り組んでいけないかと考えています。事例紹介にもある通り、技の環のスタッフたちは飛騨高山地方では飛騨漆の森プロジェクトに、美濃地方ではエゴノキプロジェクトに関わっていますが、すでに獣害対策を行っているこのエリアでヤマザクラを育てられないか、現場の職人や運営団体に提案しました。また、松炭に関しては来年度の重点調査テーマとして、松炭の最大産地である岩手県で調査を行うことを計画しています。

これを発展させて「文化財を支える森づくり」を県の次期森林づくり基本計画に入れていただけないか、県との連携会議でも提案しています。このテーマが県の基本計画に入ることによって、現場の森林組合や事業所で、この資源はこういう工芸や文化財に必要とされているから育てて供給しようという動きにつながるのではないかと思います。また、同時に、企業のESGやCSR活動と森づくりをマッチングさせる活動もやっていきたいと思っています。こういった取り組みをモデルケースとして岐阜県で実現できると、他の県でもフォローすることができて、お互いに資源の融通もできるのではないかとこの夢を抱いています。

## 行政による 支援

鶺鴒や鶺鴒舟の課題については関係する市町村に情報共有はできたものの、伝統技術を持つ職人や団体が複数の市町村にまたがることによる支援の難しさを感じています。鶺鴒は岐阜市や関市で行われていますが、鶺鴒に必要な鶺鴒舟を作る舟大工は郡上市に、鶺鴒を作る職人の団体は美濃市に存在します。岐阜市や関市は鶺鴒文化を守りたいものの、他の市町村にいる職人を直接支援することには様々な制約があります。このような伝統技術を維持継承していくためには、従来のように市町村が無形文化財指定してそれを県、国へ上げるといったやり方ではなく、県が無形文化財指定をするなどの対応も必要ではないか、という提案もしたところです。

## 広報活動

広報に関しては、評議員会でご指摘いただいた通り、県外での認知度を上げる必要があると思っています。活動が広く知られることで伝統技術にまつわる課題も広く知られ、課題解決の糸口が見つかったり、関係者同士で新たな連携関係ができたり、行政の支援へとつながる可能性が出てきます。また、県外からの評価を得ることでこの活動の意義が広く理解され、それが持続的な支援へとつながると思います。これまでは、チラシを作成して県内の市町村に配布したり、ウェブサイト、SNS(X、Instagram、FB)で情報発信しています

が、SNSに関してはまだフォロワー数も少なく効果が挙げられていないため、それぞれのSNSのユーザー層や特性に合った発信の仕方を検討する必要があるように思います。

この他に、岐阜新聞でも月1回連載していますが、新聞は自治体の首長、職員、議員などの情報源となっているようで、連載記事を目にした議員が技の環の活動を市議会でも取り上げたケースもあると聞きました。また、刊行物は冊子とウェブサイトからのPDFダウンロードと2つの方法で公開していますが、冊子になっていることで手から手に渡って、口コミとして伝わるという効果を実感しています。インターネットの時代にはなつたけれど、新聞や冊子の力もまだまだ強く、信頼性の高いメディアだと感じていて、特に刊行物は今後も力を入れていきたいです。

#### 情報の ハブとして

技の環は、情報のハブ役になりたいと考えています。様々な自治体や団体では、伝統技術を残そう、支援しようという仕組みがありますが、それが現場の職人にまで届いていないことも少なくありません。補助金などの支援制度などを調べて、それぞれのメリット・デメリット、財源や用途など情報を収集して、職人の支援に携わる人たちに情報提供したり、職人や組合などにこういった制度や賞があるから応募してみても伝えることができたらと思います。今年度関わった三井ゴールデン匠賞や明治安田クオリティオブライフ文化財団の助成制度を通して、後継者となる若い人や購買層を惹きつけたり行政の支援を得たりするためには、賞に応募したり、積極的に助成制度を利用することも必要だということ学びました。県内には卓越した技術を持ちながら、こうした賞への応募や制度の活用というところまで手が回らず、後継者を見つけられないという職人も少なからずいます。技の環が情報のハブとなり、職人や支援者と制度をつなぐ活動ができたらと思います。

#### 人員と 財政

技の環の運営体制に関しては評議員会でご指摘いただいた通りです。人員面については、これまで各理事が本来業務の一環として、あるいはボランティアで、伝統技術の現場の課題解決に関わってきました。それを個人の力量だけに頼らず、持続可能な形で社会実装すること、そして行政と民間の良い形での連携を実現することが、技の環設立の目的でした。現在は4人の非常勤の理事で運営していますが、今後の活動の拡大のためにはスタッフを増やしたいところです。例えば森林や工芸などに関わる教育機関の現役教員、あるいは公的機関を退職して専門的な知見や人脈を持つ人、かつて伝統工芸や文化財に関わっていたものの育児など家庭の事情でフルタイムでは働けない人など、伝統技術の維持継承に熱い思いを持つ多くの人たちに関わっていただける体制を作れたらと考えています。

財政面については、県からの委託事業費によって県内事業を安定した形で継続するとともに、外部資金も獲得したいと考えています。例えば、打刃物産地の全国ネットワーク作りなどの全国的な規模の活動をするには、他県の自治体からも事業を受託したり、民間の外部資金などを獲得したりする必要があると思います。

来年度も『「匠の国ぎふ」の技を支える相談事業』が継続される予定です。今年度取り組んだ案件も単年度で終わりというわけではなく、これからも長く関わっていくことになると思います。初年度同様、しっかり県内の職人や関係者の課題に向き合いながら、活動に取り組んでいく所存です。





## 座談会記録 「伝統技術の後継者を 育てる仕組みづくり」

2025年3月13日、飛騨高山まちの博物館研修室において、座談会「伝統技術の後継者を育てる仕組みづくり」を開催しました。高山市の飛騨彫刻、岐阜市の長良川鵜飼の鵜舟造船、それぞれの担い手を支える中間支援組織や行政の方たちに取り組みをご報告いただき、会場やオンラインでご参加いただいた県内外の職人や組合、県内自治体の工芸や文化財の担当者などの方たちとともに話し合いました。

### 報告

- ①「ニッポン手仕事図鑑」のインターンシップ事業と高山市の研修補助金を活用した飛騨木彫の後継者育成について
- ②文化庁の補助金を活用し、長良川鵜飼の鵜舟船頭を舟大工として育成する取り組みについて

### パネラー

伏見 七夫（飛騨地域地場産業振興センター 専務理事）  
 五十川 天士（岐阜長良川鵜飼保存会事務局）  
 高橋 方紀（岐阜市文化財保護課長） ※オンライン参加

### コーディネーター

久津輪 雅（技の環代表理事／岐阜県立森林文化アカデミー教授）

### 参加者

県内外の職人、組合、県内自治体の工芸や文化財の担当者など、約40人

## <開催趣旨・パネラー紹介>

**久津輪:** 今から「伝統技術の後継者を育てる仕組みづくり」という座談会を始めさせていただきます。私は一般社団法人技の環の代表理事で岐阜県立森林文化アカデミーの木工教員を務めている、久津輪 雅と申します。よろしくお願いいたします。

座談会ということで、飛騨木彫と長良川の鵜飼の舟大工の後継者育成について、取り組みや課題などをお話していこうと思います。今日はこの「高山まちの博物館」に20数人の方がお集まりいただいているのと、10数人の方がオンラインでも参加してくださっています。オンラインの方には生でお伝えすると同時に録画もしてまして、この様子を後日配信させていただきますと思っています。

最初にお断りしておきたいのですが、実は今日、飛騨木彫の職人さんと今年度から学び始めたばかりのお弟子さんにお越しいただいて、修業の様子をご報告いただく予定だったのですが、飛騨木彫の職人さんが一昨日体調を崩されて、お弟子さんも含め今回は参加できないということになりました。私が事前にお話をお聞きしてきたことと、後ほど飛騨地域地場産業振興センターの専務理事の伏見さんからもお話いただくのですが、この2人で代わりに飛騨木彫については報告させていただきますと思っています。

では一人ずつ自己紹介をお願いします。

**伏見:** みなさんこんにちは。飛騨地域地場産業振興センターの私、伏見七夫と申します。短い時間ですが、今日はどうぞよろしくお願いいたします。

**五十川:** 岐阜市から来ました、岐阜長良川鵜飼保存会の事務局をしています、五十川天士(いそがわたかし)と申します。よろしくお願いいたします。

**久津輪:** 五十川さんの上司の、岐阜市文化財保護課長の高橋方紀(まさのり)さんもオンラインで後でお話いただけますので、よろしくお願いいたします。

## <飛騨木彫>

**久津輪:** ではスライドを共有させていただきます。本当はお越しいただく予定だった方が、飛騨木彫の二代目小坂礼之(あやゆき)さんです。小坂さんのお仕事というのは、飛騨の彫刻の中でも非常に質が高く、ユニークな作品を作られます。もちろん伝統的な彫刻もされますが、最近の仕事では、これは東京のホテルの室内の彫刻ですね(写真1)。

**伏見:** そうですね。木彫りの置物以外でも、ホテルのエントランスであったり室内の飾りつけであったりというお仕事もされています。

**久津輪:** 高山を代表する彫師さんというか、彫刻家の方だと思います。それで、飛騨の彫刻ということなんですけれども、もともとは一位一刀彫という名前で、国の経済産業大臣指定の伝統的工芸品になっているんですね。ですが、今回は小坂さんの後継者育成に関しては、「飛騨木彫」ということで後継者の募集をしています。そもそものきっかけ、経緯をお話いただけますでしょうか。



写真1 東京のホテルに納められた小坂礼之さんの彫刻作品



飛騨地域地場産業振興センター 専務理事 伏見 七夫さん

**伏見:** 私共は40年前に組織された財団でございまして、岐阜県をはじめ飛騨地域三市一村、そして地元の飛騨地域の産業団体による「出捐」、一般企業でいうと「出資」ということになるんですけど、そういうことで組織ができております。飛騨地域の伝統工芸をはじめとしたものづくりを支援する団体です。(スライド1)

設立が40年前ということで、今から3年ほど前の令和3~4年に、今後のこの財団のあり方、みなさんを支援していく方法などを改めて検討しようと、経営検討委員会を立ち上げて見直しを行っております。その中では産業団体のいろいろな組織のみなさんにアンケートを出したり、面談をしながらご希望を伺ったりして仕事のあり方について検討をしました。

そういった中で、やはり後継者を育てることが一番必要だと強く感じまして、アンケートとか面談で、どうですか、後継者を見つけないかということをお話しさせていただいてお

りましたが、なかなか当初手が上がる組合とか組織はなかったというところですよ。

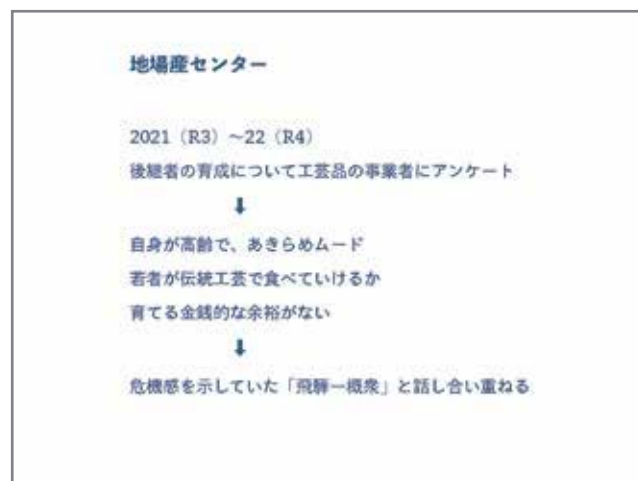
そんな中、「飛騨一概衆」という木彫りをされている4人の個人事業者さんの組織から何とかして見つけたいという話がありました。見つける方法として、「ニッポン手仕事図鑑」という東京の会社が「インターンシップ事業」というのをやり始めて3年目ほどだと思いますが、その事業をやれば一人確実に見つけることができるという実績がありまして、少しお金はかかるのですが、やはり見つけることが大事だということで、経営検討委員会の中で了承いただいたという経緯がございます。

(スライド2)

**久津輪:** ありがとうございます。この飛騨一概衆さんなんですけれども、木彫家集団で2018年に結成されたグループということですね。一位一刀彫と言わずに飛騨木彫と言っているのは、この方たちは一位一刀彫の組合には入っていらっしやらないということでしょうか?(スライド3)



スライド1



スライド2



スライド3

**伏見:** 入っている方もいますし、過去に入っていたということもあります。一位一刀彫の技術に基づいているということがあります。今後、将来を見据えていった時にイチイの木だけでは自分たちの作品や仕事が表現できなくなってくるということが危惧されまして、イチイの材に限らず木彫をやっていくという意味で、一位一刀彫組合との線を引いているということです。今日も組合の方からもお越しいただいております。

**久津輪:** 少し補足をしておくと、伝統的工芸品に指定されている一位一刀彫というのは材料がイチイであることが条件の一つに入っているということですね。そのイチイの木そのものが大変成長が遅く、特に木彫に使えるような大きな木というのがもうほとんど岐阜県内では取れないので、いま北海道からも取りにいっているけれど・・・。

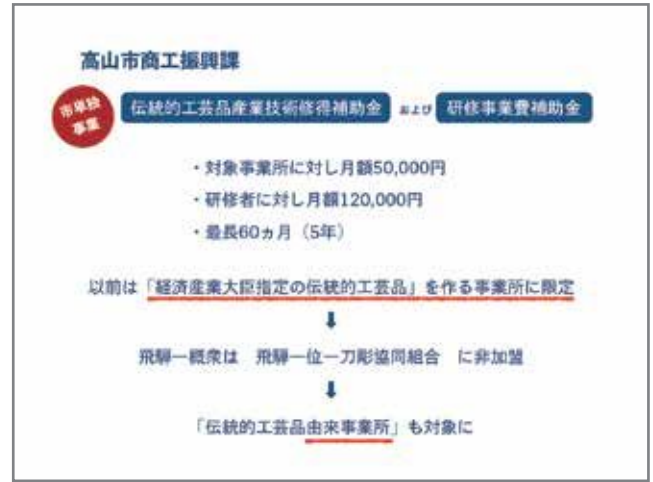
**横井:** もう全国的にもないんですね。

**久津輪:** 森林・樹木の専門家の方(元森林文化アカデミー教授の横井秀一さん)もいらしているのですが、全国的にももうイチイがない。だからイチイの一刀彫ということに限らず、他の木を使ってでも木彫技術を残していこうということで、一刀彫の組合とはまた違う形で活動していらっしゃるということですね。

**伏見:** はい。

**久津輪:** それで、もともと高山市の商工振興課では、市単独予算の事業として「伝統的工芸品産業技術習得補助金」、それから「研修事業費補助金」ということで、対象の事業所に対して月額5万円で、研修者に対しては月額12万円。最長で60ヵ月という制度があったということですね。

そしてここがちょっとネックだったわけですが、以前は経済産業大臣指定の伝統的工芸品を作る事業所に限定して出していたらよかったのだけれども、先ほどの飛騨一概衆というのは、



スライド4

一位一刀彫協同組合には非加盟の方もいらっしゃる。その中で後継者を育成したいと手を挙げた方にどうサポートするかというのを市の中で検討された。地場産センターさんだと思えます。それで今、対象が「伝統的工芸品由来事業所」という名称になっているということですね。この由来事業所というのは、伝統的工芸品から派生して、その技術を継承するためにやっていらっしゃる所という意味でいいですね。

(スライド4)

**伏見:** はい、この事業そのものが高山市で作られているということはとてもありがたいことでして、かつては伝統的工芸品に限るということでしたけれども、組合に加盟していない人や技術の高い人がいて、その人が後継者を育てようとしていることを市と情報共有した結果、市の方で改正して認めていただけるようになったというのは大きなポイントです。

(スライド5)



スライド5

**久津輪：** ありがとうございます。高山市役所の方に電話でお聞きしたのですが、もともとは1993(平成5)年から始まった。「高山市伝統的工芸品 飛騨春慶および一位一刀彫 後継者育成奨励金」という名前で、当初はお弟子さんの方に月額1万円というだけの補助金でした。それがだんだん、お弟子さんだけに補助金を支給されても、こういったところは事業規模が小さくて、お弟子さんを教えている間はお師匠さんの手が止まってしまうから、やはりお師匠さんもサポートしなければいけないという話になったり、あるいは伝統的工芸品だけではなく伝統建築の大工さんも対象にしてあげたいということだったり。また、金額を増やして期間も延長するというので、現在のお師匠さんの事業所に対しては5万円、お弟子さんに対しては12万円で、最長5年間。これは多分、全国的に見ても手厚い制度なのかなと思いますね。

**伏見：** はい、ありがたいです。本当に。

**久津輪：** 今日、高山市の商工振興課からも2人お越しいただいているんですけども、何か補足してお話しいただくことはありますか？

**二村：** 少しでも多くの方にこの補助金を使っていたらという願っています。この補助金は、月額で12万円で5年間という期間となっておりますので、伝統的工芸品産業を後世につ

なげていくために多くの方に使っていただきたいと思っております。また、その他の市のいろいろな補助金も使っていただきながら市として支援していきたいと思っており、春慶や一刀彫等の団体の方とも協力しながら後継者を増やしていきたいと考えています。

**久津輪：** 高山市の方とお電話でお話した時には、まだまだ金沢市には負けます、金沢市は手厚いですよね、みたいな話もあったりして。今石みぎわさんは東京文化財研究所の方なんですけれども、全国的に見ても割と手厚い方ですよね。

**今石：** そうですね。手厚いと思います。規模に対して。

**久津輪：** 先ほど伏見さんからお話しいただいたのが、地場産センターからニッポン手仕事図鑑という会社に対して業務委託をされたということですね。このニッポン手仕事図鑑さんは、もともと伝統工芸などの動画撮影をしていて、こういう技術を残していこうという団体で、最近はこの後継者インターンシップ事業というのに力を入れているということですね。私の学校にもよくチラシとかポスターを送っていただくんですけども、日本全国の工芸・美術系の大学140校に印刷物を送る、それからLINEの公式の「伝統工芸インターン」というアカウントには4100人の登録者がいるということで、広報力をたくさんお持ちです。これを一昨年に実施したところ、一次選考でなんと、



高山市商工振興課 二村伸一 課長(中央)



スライド6

34人も集まったと。

それを書類選考で11人に絞り、辞退が1人あって、2次選考はオンライン面談をされて10人から6人に絞り、ここで辞退が1人あって、5人に高山に実際に来ていただいて、インターンシップを2日間。これは小坂さんの工房の中でやられたんですね？(スライド6)

**伏見:** 工房であったり、うちのセンターであったり、また飛騨・世界生活文化センターの展示を見ていただきました。

**久津輪:** で、最終的にそこから1人に絞られたと。ちなみに、もし公にできればですが、この手仕事図鑑さんに業務委託をするのにいくらかかるのですか？

**伏見:** 180万円です。私共としてはうちの事業の中ではすごく金がかかるなど。でも実績を作って、いろいろな組合の皆さんにお示しできたら180万円は高いものではないと判断しまして、今までの実績が100%だということだったので、私としては踏み切りました。やっぱりその実績ができる、また後ほどの資料にもございますけど、いろいろな波及効果が出てきておりますので、初期の実績を作ってお示ししたかったということもあって、180万円は英断しました。それだけの価値はあったと思っていますね。

**久津輪:** ありがとうございます。これは小坂さんから送っていただいた写真なんですけど、実際に応募者の方たちといっしょに何かやっていらっしゃるんですね？(写真2)

**伏見:** 2グループに分かれてですね、これはうちのセンターですけど、高山市からのいろいろな支援事業の話であったり、いろいろな状況をお聞きしながらですね。高山市を理解していただいたり、今後の設計をお手伝いしたいということで、こういう面談会をやっています。



写真2 地場産業振興センターで高山市からの説明を受ける

**久津輪:** こちらが小坂彫房さんでの実習ですね。(写真3)

**伏見:** そうですね。彫刻刀を使っていない方もいましたが、茶杓を作るということで。茶杓にはいろいろな要素があって、ふだん彫刻刀を使っていない人も一生懸命になって作るという、そういう実習を通じて選考をさせていただきました。できあがった茶杓の上手さ器用さじゃなくて、実習に取り組む姿勢であったり、出たゴミを片付ける姿勢であったり、そういった面も見るという実習を小坂さんに準備していただきました。

**久津輪:** なるほど、分かりました。そもそもこういう募集をして、彫刻の後継者に34人も応募があったということ自体、やはりびっくりされましたか？

**伏見:** そうですね。小坂さんもびっくりされて、高山で拡声器で叫んでも、なかなかじゃあ私やりますという手は上がらないと思うんですけど。その辺りがやはり全国の美術大学140校、そしてLINEが4100、このLINEは今年は6000を超えているそうです。そういう発信の仕方を学んでいます。やり始めたので3年間続けて、その後についてはまた検討するというところで、一生懸命そういう手法も学ばせていただいています。



写真3 小坂彫房での実習



写真4 小坂礼之さんと賀東楓さん

**久津輪：** はい、ありがとうございます。今日残念ながらお越しいただけなかった小坂さんはこの後ろ姿の方なんですけれども(写真3)、事前にこの座談会の打合せの時に、最終の5人の中から1人を選ぶ時の判断基準は何だったんですかとお聞きしたら、飛騨木彫の後継者候補に決まったらあなたはどうしますか、と1人ずつに聞いた時に、家族と相談して決めさせていただきますとか、他の工芸産地にもあちこち見学に行っているのというような答えが多い中で、最終的に選ばれた女性、この写真の眼鏡をかけた彼女がそうですね、彼女だけは大学の2年生だったんだけど、大学をすぐに辞めて移住しますと断言したそうです。その思い切りの良さとか、これに賭けるという思いが決め手になって、彼女を最終候補にさせてもらいました、と小坂さんからはお聞きしています。

それで、去年の4月から高山で実際の研修が始まったわけですね(写真4)。これには高山市の先ほどの後継者育成事業の補助金が出ているということですね。事業者さんに5万円で、研修生の方に12万円。住まいはシェアハウスに住んでいるというお話でしたね。

小坂さん自身は本当にものすごく集中してお仕事をされる方で、夜は11時くらいでいったん締めてご飯を食べて洗濯をするんだけど、その後夜1時でも2時でも僕はやっちゃうんですよね、という話をされていました。このお弟子さんの賀東楓(かとうかえで)さんですけど、賀東さんもいったん5時でシェアハウスに戻ってご飯を食べて、また戻ってきて夜11時ぐらいいまで。しかも月曜日から土曜日までやっている、そんなお話をお聞きしました(写真5)。

で、もともと彫刻を大学でやってきてただけに、基本的な技術というのは非常に高くお持ちで、この写真のような作品はすでに高山に来てから作られたということですね(写真6)。伏見さんは毎月のように通って、様子を見ていらっしゃるんですか？

**伏見：** 毎月というよりは、何かにつけてですね。いま紹介があった通り、ずっとのめり込んでしまうので、外へ誘い出したりということで。輪島地域の児童クラブへコマ遊びに行くよと言ってボランティアに誘ったりですね。先週は朝日町の保育園でコマ回しをしてねというリクエストがあったので、そういった折にもコマ作家さんと賀東さんを一緒に連れて。本人も行きたいというものですから。そういうふうにしなから地域のこと、災害のことなども一緒に知ってほしいということで、連れ出すようにしていますね。

**久津輪：** 連れ出すようにされているのは、どのような思いや意図があるのでしょうか。

**伏見：** やはり5年間って長いと思うんですよね。のめりこんでしまって心に余裕がなくなって、健康を害したり精神的に少し行き詰まったりしてはいけないので、そうなる前に、顔色が見えたり、おしゃべりが見えたり、そして表情が見えたりということが大事なサポートだと思っていますので。5年間放っておいて後悔ないように、塩梅よく育てていってほしいという思いですね。

**久津輪：** なるほど。ちなみにその辺りは、高山市と地場産センターで何か役割分担的なことでやっていらっしゃるんですか？

**伏見：** 一緒にですね。事業者さんも含めて一緒に面談を行ったりはやりますけど、日常的な所ではやはり、お金関係の相談は市役所で頑張ってください。それ以外の生活面とか、そういう諸々は、私の方でと思っていますね。

ものづくり全般、どんな産業も農業もそうなんでしょうけど、ものづくりはやっぱり人づくりだと思っていますので。その点をおろそかにするといいものを作ろうとしても、ものはできていかないという捉え方をしています。

**久津輪：** 伏見さんご自身も、もともとは高山市役所のご出身でしたね？

**伏見：** はい、農政部でした。農業の後継者も育成するシステムがあって、そのようなことも経験しているので参考にしながらいまの後継者育成をやっています。

**久津輪：** 部署は違いますが、市役所時代のご自身のそういう後継者育成の立ち位置や意識と、地場産センターというもう少し現場に近くなった今の立ち位置や意識を変えたところがありますか？

**伏見：** そうですね。農政の時は、現場というよりは統括する部長職でしたのでなかなか出られない。そして農業部門では後継者育成の形がある程度確立されていました。こちらの方



写真5 作品に取り組む賀東さん

のお仕事をさせていただいたら、まだまだそういうのがシステムとして十分でなかったものですから、かえって今、現場で一生懸命走り回っています。

**久津輪：** はい、ありがとうございます。小坂さんも、こうやって伏見さんがまめに様子を見に来てくださるのでありがたいと仰っていたのと、伏見さんは賀東さんのことがかわいくてしょうがないんじゃないかなって仰っていましたよ(笑)。

**伏見：** 賀東さんもですし、他のまだ研修している人たちもいますし。特に賀東さんは2年で中退してでも来るという覚悟。小坂さんも言っていましたけど覚悟が決め手だったということで、何とかうまく育ててほしいと思っていますね。

**久津輪：** ほぼ1年経ってみて、今はどうですか？

**伏見：** 先ほど12万円の毎月の補助金で、そのお金の大小について心配をしていましたけど、決めた当初から金額に関してはこだわりはなかったと。やっぱり小坂さんの技術を一生懸命学べるということの方が大きいそうです。その金額で生活していけるのかということに関して私は心配していましたが、そうではないという若者の意気込みっていうのは、まあ大変ありがたいんですけど、生活の物価がすごく上がってますからね。早く作品ができて、それを地場産センターのギャラリーで委託販売できるように、もう作品は預かって並べていますけど、どんどんそういうものが売れていくことによって、少しでも生活費の工面ができるんじゃないかということも考えています。

**久津輪：** はい、ありがとうございました。これも小坂さんに直接ここでお聞きしたかったことなんですけど、小坂さんにはそもそも今までお弟子さんが、自分のお子さんも含めていらっしやなかったと。いま多分私より2つ3つ年下なので55～6歳ですけど、この時点であえて弟子を取ろうと思った理由をお聞きしました。そうしたら、これから弟子を雇ったところで食べさせていけるのか、弟子自身が食べていけるのかという不安と、



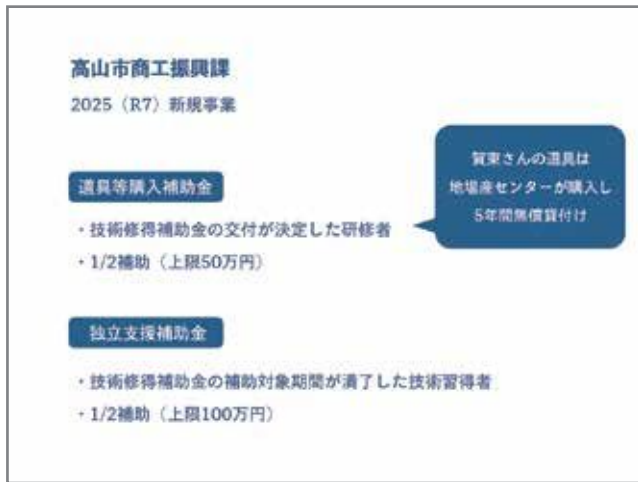
写真6 賀東さんの作品

だけどこの技術を飛騨から絶やしていいのかという思いとで、揺れ動いて悩んだそうですが、やっぱりこの技術を絶やしたらいけないという思いの方が強くて、結局弟子を取ることに踏み切ったというお話をされていました。

では今何が一番課題だと思いますか、という話をお聞きしたところ、入口に関しては、それこそ地場産センターさんの取り組みとか、インターンシップ事業とか、高山市のいろいろな補助制度がしっかりしているので何とかなるけれど、むしろ出口の所がやっぱり心配で、仕事をどうやって作っていいのかというところを一番課題に感じていると仰っていました。

特に一位一刀彫、あるいは飛騨木彫というのは従来から固定観念的なイメージがありますね。よく言われるのがテレビの上の干支の置物みたいな。そういうものに代表されるような彫刻のイメージはどうしてもあるんだけど、先ほど小坂さんの作品を見ていただいたように、本当にいろいろなことができる。そういうことをもっとたくさんの人に知ってもらえれば、いろいろな新しいマーケットが広がって、新しい時代の人たちの仕事にもつながっていくんだけど、それをどうやって発信したらいいのか職人の立場では分からないと仰っていたんですね。

だから特にこういう伝統的工艺品、経済産業大臣が指定するもの、あるいはそれに類するものというのは、やはり産業として位置づけられているわけだから、売り先をきちんと見つけてあげてビジネスとして成立させてあげることが大事で、だけどやっぱり事業所の数とか問屋の数が小さくなってくると、それに代わること、こういう仕事の可能性があるということを何か中間支援組織というか、地場産センターさんのような所だとか、あるいは我々技の環のような所かもしれないですけど、そういうところをうまくつないであげられるといいのかなと、小坂さんの話を聞きながら思ったところです。



スライド7

**久津輪：** 先ほどの続きに戻ります。これも高山市の2025年度からの新規事業で「道具等購入補助金」ということで、「技術習得補助金」の交付がすでに決定している研修予定者の方が対象だから、新しく弟子入りされる方に50万円を上限として道具を買うためのお金が1/2補助されるということですね。それと「独立支援補助金」は、研修期間が終了した後に独立をする時に上限100万円として1/2補助が出るという。だから入口と出口に対して補助が出る。入口で道具を買う、出口で独立するための制度も新しくできたということで、これも本当に手厚い仕組みだと思いますね。(スライド7)

賀東楓さん、小坂さんのお弟子さんに関してはまだ弟子入りした時にこの制度はなかったもので、賀東さんがお使いになっている道具というのは、何と地場産センターさんで購入されたそうですね。

**伏見：** はい、お願いはしてはいましたが、市の方として事業化ができなかったということもございまして、地場産センターで購入をして、5年間の無償貸付ということでセンターのものをお貸ししております。そういう経緯もあって、令和7年度からは高山市でこういった事業を作っていただいたということで、本当にありがたいです。市とは情報共有を常にしながら、人を育てていくことを一緒にさせていただいています。

**久津輪：** ちなみにこういう補助制度というのは、どちらから話していくものなんですか？地場産センターさんから提案されるのか、それとも市の方で？

**伏見：** この事業の立ち上げにあたり、人を育てることについて何度も何度も概衆と話し合いをしながら、困ることは何ですか、どういことを要望しますかという聞き取りをしました。それを、ぜひこういうところに支援をしていただきたいということで市のほうへ共有しました。市も財政課から厳しいチェックがある中、予算獲得を頑張ってくださいました。新規の事業を組むということはなかなか難しいんです。その辺りを一緒に熱量高く交渉していただいたので、これはか

なり大きいです。

**久津輪：** 大きいですね。二村商工振興課長さんにお話しただけだと思います。

**二村：** 道具等購入補助金については、若い方たちが入られた時に、少しでも金銭的な支援ができればというところで創設した補助金で、伏見さんからもいろいろご意見をいただきましたが、1/2補助ということで少し負担していただくことになりました。個人の道具ということで大切にしてくださいという意味も込めて、補助率を1/2とさせていただいたところです。「独立支援補助金」については、今年度3月末で春慶塗師の研修生さんが5年の研修期間を終えて独立されますので、事業者の方と研修生の方と会話する中で、100万円というとなかなか足りない面もあるんですけど、少しでもお金のかかる独立費用の一部を支援していきたいと考えて創設した補助制度です。

**久津輪：** 高山市はこういう制度が本当に次々にできて、非常に手厚い印象があるのは、やはりこういう分野が高山市として大事だとか、肝だとか、そういうことがあるんですね？

**二村：** 高山市の大事なブランドということで、伝統的工芸品産業をはじめ、家具とか建築といった高山市を代表する産業を大切にしていきたいという思いがありますので、少しでも高山市として後世につないでいけるように支援していきたいと考えています。関係者の中には、そうした産業に対し熱い思いを持った方々がいらっしゃいますので、そうした方々と会話を続けながら盛り上げていきたいと思っています。

**久津輪：** はい、ありがとうございます。これに関連することで、少し話は逸れるんですけども、最近のニュースで非常に印象に残ったのが、飛騨市が来年度から始める新規事業で、山中(さんちゅう)和紙の職人さんに直接人件費を支給するという事業を始められるそうです。山中和紙というのは飛騨市の伝統的な和紙づくりなんですけれども、国の伝産品の指定はされていません。無形文化財として飛騨市が認定しています。原料の楮を自家栽培するところから始める特色のある紙作りなんですけど、現存する事業所さんが2軒しかなくて、市が新たに予算を計上して製造技術が途絶えないように職人の生活保障と伝承を支援する「半官半民の仕組み」を目指すのだそうです。だから産業というところから、公的なもの、文化財として守るところにシフトしているような感じもちょっとするんですね。

その点でいくと、課長さんにもまたお伺いしたいんですけども、こういう伝統工芸や伝統建築の職人さんを支えるという時に、それが産業なのか、それとももう少し公的なものとして支える必要性を感じていらっしゃるのか、また、こういう分野の支援をする時に他の産業とのバランスとか、考えどころがいろいろあるような気がするのですが、そういう点について課内で検討されたことはあったのでしょうか？

**二村：** 産業として成り立つ限りは産業を側面から支えていくというのが大事なところだと思っています。どうしても公的な直接的な支援がなければ成り立っていかないという時点になればそういった人件費の支出ということも可能性としてはあると思うんですけども、まだ春慶や一位一刀彫、飛騨木彫では、お弟子さんも入り、一生懸命やっていたところですので、市も一緒になってそれぞれの産業が今後も成り立っていくようにサポートしたいと考えています。現在、他の産業として伝統建築にも支援していますが、他にも職人技を必要とする業種もいろいろあり、支援してほしいという声もあるんですけども、高山市のブランドの一つとして支えていける業種について、区分することが難しく、幅もありますが、今は伝統的工芸品産業や伝統建築産業に限定してサポートしているところです。ただ、市内には技術の継承が必要な太鼓の皮張り職人もおり、後継者の育成を心配する声もあるため、そういうことも検討課題だと思っています。

**久津輪：** ありがとうございます。今の観点で伏見さんから何かありますか？

**伏見：** 私共の財団は飛騨地域3市1村ですので、飛騨市もちろん一緒に支援をさせていただくエリアに入っているんです。後継者を見つけることに関して、飛騨市の担当部署、そして山中和紙のところにもどうですかとお話をさせていただいて、見つけたいということを仰らなかったという経緯はございま

す。それが令和3～4年ですから、それ以後に令和7年度の事業としてこのように予算化されたと思うんですけど、同じエリアの中ですので、お声掛けはさせていただきます。そして山中和紙の商品も、地場産センターのギャラリーで取り扱いさせていただきながら、販売の方もお手伝いさせていただいています。

**久津輪：** ありがとうございます。それぞれの地域で何を大切なものとして今後残していくか、どう支えていくかというのは、やっぱりその地域の人たちみんなでコンセンサスを作り、合意を得ながら、やっていく必要がありますね。

それで実は、高山市では今後も次々と後継者を受け入れて育成しようという動きがあるそうで、伏見さんに作っていただいた資料なんですけど、ご説明いただいてもいいですか？



## 最近の伝統工芸後継者 育成状況

	研修生	受入事業者	受入経緯	R5	R6	R7	R8	R9	R10	R11	R12	R13
1	三浦健吾(愛知県) 京都美術工芸大	川原俊彦 飛騨春慶塗師	組合			→						
2	賀東楓(東京都) 女子美術大	小坂礼之 飛騨木彫	R5インターン		←					→		
3	挾土只徹(高山市) 京都伝統工芸大	挾土宝眼 飛騨木彫	親子		←					→		
4	Aさん (北海道) 京都伝統工芸大	小坂礼之 飛騨木彫	直接			←				→		
5	Bさん (北海道) 京都伝統工芸大	挾土宝眼 飛騨木彫	直接			←				→		
6	Cさん (愛知県) 京都伝統工芸大	野川俊昭 飛騨春慶塗師	R6インターン			←				→		
7		小鳥昇一 春慶木地師	R7インターン				←				→	
8	Dさん (愛知県)	NPO法人 飛騨漆の森P	R6地域おこし協力隊			←			→			

スライド8

**伏見:** (スライド8を見ながら)伝統工芸の後継者の最近の状況ということで、ナンバー1から8までご紹介をさせていただいております。1番の方は先ほど課長からお話がありました。令和7年の4月に独立されるということで、これは飛騨春慶の塗師さんです。2番目が先程来話をしている賀東楓さんで、小坂さんのところで令和6年の4月から5年間の実践ですね。

そして同様に令和6年の4月から5年間、挾土宝眼(はさどほうげん)さんと仰るんですけど、一概衆のメンバーで、息子さんが帰ってきて親元で研修をするということで、こういった場合も先ほどの月12万円の高山市の補助金が該当になりまして、いま2人の方がそのお金をいただきながら研修をしています。

そして4番目のAさんは、小坂さんのところへ去年の夏休みに来まして、ぜひ研修したいということ強く希望されて、小坂さんは1人採るのもやっとだったのにもう1人引き受けるということで、この4月から5年間スタートします。

同じように挾土さんのところでも、直接会いに来てくれたBさんもを受け入れるということで、この4月から5年間来てくれます。

そして6番目のCさんは、今日お越しいただいている野川俊昭さんの所で春慶の塗師として4月から5年間ということで、この4月からの人が3人。

先ほどから言っているように、こういう1人2人と実績が見えてくると、だんだんいろいろな波及効果があって、インターン

シップ事業をやらなくても直接やりたい、受け入れてくれと熱い思いの方が来られる。で、ちょっとお気づきでしょうか。3、4、5、6番の人たちが京都伝統工芸大学校という所から希望されているという。この方たちは皆さん同年代です。今後の一つの方向性として、そういった所へアプローチすれば手が挙がってくるのかなということも一つの参考になっております。

そして今年度のインターンシップ事業ですけれども、今度は春慶の木地師の方で、小鳥(おどり)昇一さん。かつては小鳥さんにも話して手が挙がらなかったんですけど、こういう姿が見えてくると、わしもやってみるぞと仰っていただいて。それでインターンシップ事業を今年やりまして、決まれば来年の4月から5年間ということ。そして8番目のDさんはきょう、ちょうど会場にいますね。もう名前を言っていていいということだったので、酒井今日子さんですが、NPO法人飛騨漆の森プロジェクトへ、令和6年度の高山市の地域おこし協力隊で採用していただいて、この3月1日から現場に入られております。こういう形でみなさん移住の方ばかり、Uターンの方も1人ありますけど、ものづくりの技術について1人2人の核にしないで10人ほどの集団を作ることがとても大事です。そしてまた次のところで10人ほどの集団を作る、ということが人づくりとして大切だということで、ご紹介させていただきました。

**久津輪:** はい、ありがとうございます。本当にこの京都伝統工芸大学校のみなさんは、挾土さんの所の息子さんを同級生



飛騨春慶塗師 野川俊昭さん

たちが訪ねて遊びに来て、みんな弟子入りにつながったということですね？

**伏見：**うちの地場産センターを見に来てくれて。その時はまた来るってことは全然決まっていなくて、帰ってからのアプローチでこういうことになって、あの時の子が！という感じです。伝統工芸大学校は日本全国から人が集まっています、実際に挾土さんの息子さんも彫刻科の子たちなども技術が高いので、早く売れる作品を作れるようになってくると思うので、どんどんそういう子たちの発表の場を設けることが私共の支援の仕事だなと思っているんですね。

**久津輪：**ありがとうございます。せっかく今日野川さんにいらしていただいているので、一言いただきたいですね。もう入られる方は決まっているんですね？インターン事業を通じて、そもそも受け入れようというきっかけとか、今の思いをお話いただければ。

**野川：**さっきもここに出てきたように、自分もどちらかというともう諦めていたんですけど、伏見さんの方から去年の今頃にお話があって、まあやってみよう。そしたら47人も応募があって、小坂さんの仲間内の人と知り合いなのでどういう状態だったかとお聞きして、だいぶん選考に悩まれたとかそういうことを聞いて、どうなることか心配したんですけど、最終的に何人か減らしていきました。・・・で、その時落ちた方がここに（注：春慶塗師のインターンシップ事業の選考で漏れた後に、地域おこし協力隊に応募して飛騨漆の森プロジェクトに採用された

のが前出の酒井さん）。

でもこうやってつながっていくということはいいことだなと。今からちょっと心配もあるけど期待もあるということで。来週あたりに引っ越してくるという話を聞いています。4月からうちへ来てもらって、いろいろな塗り物の補修から、新品を作るということをやらせていきたいと思っているので、今すごく悩んでいるところです（笑）。

**久津輪：**はい、ありがとうございます。野川さんは先ほどのニッポン手仕事図鑑のインターンシップ事業を通じて応募を呼びかけたところ、47人も集まって、その中から1人を選考された。それに応募していらっしゃった方が酒井さんで、酒井さんは落選してしまったけれども漆の森プロジェクトの地域おこし協力隊員として採用されて、飛騨にいらっしゃったということですね。オンラインで聞いている県内のよその自治体からすると、これだけの次世代の職人の卵がグループにいるというのは、とても羨ましいことかなと思いますね。

**伏見：**きょう組合長さんがお見えになる一位一刀彫の方（注：飛騨一位一刀彫協同組合の津田真吾代表理事が会場に参加）も、みなさん最初はやっぱり大変だということはお考えでしょうけど、何とかして組合の中で後継者を作ると話し合いを持っていただければ、いつでも飛んで来ますので。まわりでいろいろな若い人たちが育っている実績が出てきましたので、今まではそうは言っても俺も歳だからと仰っていた方々が、多少なりとも変わると思いますので、組合長さん、またどうぞお願いいたします。

**久津輪：** オンラインの方は、伏見さんのような人がほしいとみんな思っていると思いますよ(笑)。ありがとうございました。飛騨木彫に関する報告は以上で終わりですけれども、私から補足で一つ情報提供をさせていただきます。伏見さんのような活動をしてくださる方が地域にいらっしゃれば本当にそれがベストだと思うのですが、私達もそういう職人さんと行政の間をつなぐサポート役ということで団体を立ち上げ、今年相談を受けた1つに、こんなことがありました。

ある伝統工芸の職人さんの工房で、ほぼ1人でやられている所で、2年前に研修生の方が入れられたんですけど、一年半ぐらい経った所で人間関係が悪化してしまって、お師匠さんが研修の残り期間が短くなってイライラされたり、お弟子さんもなかなか聞きづらくなってしまったりしました。そこで、その工芸の組合から間に入ってほしいと相談を受けました。

私達が何をしたかという、まずはその職人さんとお弟子さんの双方から聞き取りをして、それぞれどういうことを課題に思っているかを聞いて、私達なりにこういう問題点がありましたというのを組合の方にまず示しました。今度はその組合の人と私達と職人さんとお弟子さんと、みんなで集まる機会を設けて課題を共有して、こういう解決策を取ってみませんかという提案をしました。

具体的には、そもそも職人さん自身が系統だった教え方を受けておらず、お父さんや先輩の職人から見て覚えろ、盗め、ということで習ってきました。また、常に仕事が入ってきて納期もあるので、研修生に順番に教えたくても納期優先で対応します。そうすると研修生にとってはもう習う順番がぐちゃぐちゃになってしまうわけですね。その辺りを調整してもらって、研修期間中は研修を優先しましょう、取引先の中で納期を待ってもらえる所は待ってもらいましょう、とお願いをしたのと、職人さんとお弟子さんがそれぞれ毎日やったことをどう自己評価しているか、職人さんはお弟子さんがどれぐらいできたかと数字で評

価する。お弟子さんも自分がどれだけ習熟したかを数字で評価する。その評価表を毎日書いてもらい、私達が定期的に見させてもらう。最初は2週間に1度で、今はだんだん安定してきて1ヵ月に1度になったんですけど、定期的に面談をしています。

高山市のようにこれだけ充実してきて同世代の研修生も増えてくると、他に相談相手もできると思いますし、伏見さんのような方もいらっしゃいます。でも他の自治体でこれだけたくさんの方の工芸の研修生の方がいないとか、あるいは中間支援組織がないとかいう所は、もしよろしければ技の環に相談していただければ、できる限りの対応をさせてもらいたいと思っています。

もう1つ事例紹介ですが、私は木工関係でスウェーデンの木工作家さんと親しくしているのですが、スウェーデンにはもう何十年前前から「工芸支援員」という非常勤の県職員がいて、各県に2人ずつ配置されていると。その人達自身も工芸家だったりするのです。その人達の仕事は何かというと、まさに工芸と需要先のつなぎ役だと言うんですね。例えば、新しく学校ができる、病院ができる、どこかの公共施設をリノベするという時に、例えばこのコーナーにこの彫刻作家さんの作品を置きませんか、とか、この織物作家さんのタペストリーを掲げませんか、という提案をして、それを公共機関で予算をつけてもらい、職人さんが仕事をするという。そういう仕事をする公務員がいるという話を聞いたことがあるんです。

特に伝統工芸品とか、産業として分類される分野のことというのは、新しい需要をどうやって作るができるかということが大事だと思っています。伏見さんも努力されていますし、高山市でもいろいろな形でやっていますし、今後はいろいろな自治体、あるいは私達のような支援組織が取り組んでいければと思っています。





### <鵜舟造船>

**久津輪:** はい、大変お待たせしました。後半の鵜飼舟のお話をさせていただきます。

まず鵜舟の概要をご説明しますと、長良川の鵜飼に関する舟は、鵜匠さんが乗るものと観光客が乗るものがありますが、今回お話するのは鵜匠さんが乗る方です。全長が13メートルあり、材料はコウヤマキが用いられます。日本中のほとんどの舟はスギで作られるものがほとんどなのですが、この長良川とか木曾川の舟はコウヤマキ、ちょっと良い木で作られます。

今は観光がメインになってしまいましたが、もともとは漁業でしたので、それぞれの鵜匠さんが舟大工さんに注文して作ってもらって、今でもそうなんです。かつてはこの川の舟というのはいろいろな需要があって、鵜飼はもちろんですが、もっと小規模な網漁であるとか、昔は土木工事のために石を運ぶための舟、田んぼで農作業の時に苗を運ぶ舟とか、いろいろな需要があって舟大工さんの仕事があったわけです。

だけど、今はそれがほとんどFRPで作るプラスチックの舟に変わってしまって、木の舟の需要というのが鵜飼に代表される伝統的な漁法とか、ほんのわずかになってしまったわけですね。

それで長良川に関して言うと、現存の舟大工さんがかろうじて2人いらっしゃって(スライド9)、左側的那須清一さんはもう93歳です。森林文化アカデミーのすぐ近く的美濃市に住んでいらっしゃいます。もうこの方は年齢からも分かる通り、実質的

には仕事はしていません。右の方が、那須さんが若い時に育てた田尻浩さん。お父さんの仕事は風呂桶屋さんなんですね。舟も桶も水が漏れないように木を組んで作る仕事ですね。

だから若い頃に舟造りを学んでこいと言われて那須さんの所に修業に出たのです。しかし田尻さんも65歳で、この後どうするんだということになり、岐阜市の方で始めたのが岐阜長良川鵜飼保存会という団体を通じて、鵜匠の船頭さんを舟大工として育てていこうという取り組みになります。

ここで、岐阜市文化財保護課の高橋方紀(まさのり)課長さんにスライドを見ながらお話しいただこうと思います。



那須清一さん(93)

田尻浩さん(65)

スライド9



岐阜市文化財保護課 高橋方起 課長

**高橋：** 岐阜市文化財保護課の高橋と申します。よろしくお願いいたします。

舟造りのきっかけのお話なんです、先ほどご紹介いただいたように舟大工の方が2名しかなくて、現役の方がおひとりだけという状態の中で、舟がないと鶴飼が成立しないので、ご案内の通り船頭さんにやっていただくという取り組みをしています。

しかし鶴匠さん個人ではできないしどこがやるのかということで、当時、実は保存会というものが文化財の認定を受けるための団体だったので、特にお金を執行するかそういうことをやっていなかったんですね。なのでまずお金を使って事業ができる仕組みを作るところから始めて、ようやく令和3年度からできるようになったという流れですね。

**久津輪：** お金を執行できるようにするというのが、この図の「『長良川の鶴飼漁の技術』保存活用協議会」というものになるんでしょうか？（スライド10）

**高橋：** これがいろいろありまして、鶴飼漁というのは関市と岐阜市が一体で文化財認定されているので、両方にかかる事業をやるのがこの協議会なんですね。で、長良川鶴飼保存会というのはもともと鶴匠6人で構成していました。文化財の保存団体というものだったんですが、この保存会の事務局を岐阜市が務めるようにして、岐阜市からも負担金を入れて、文化庁からの補助金ももらいながら、実際の事務執行は今日そちら

の会場にみえる五十川さんを雇用する形をお願いをして、保存会が舟大工も雇用し、さらに指導者である田尻さんも雇用して造船をしたという流れになります。

です、岐阜市がやる事業、保存会がやる事業、協議会がやる事業、3つそれぞれ、全部合わせて鶴飼の保存活用の事業をやっているという流れですね。（スライド11）

**久津輪：**（スライド10、11を見ながら）なるほど。図で色分けをしていますが、青色の岐阜市役所が直接やる事業がユネスコ登録の推進、調査報告書の作成。桃色の保存活用協議会がやる仕事というのが保存活用計画の策定と船頭の養成。緑色の岐阜長良川鶴飼保存会でやっているのが用具の新調、鶴舟造船、船頭体験教室、ということになります。

**高橋：** そういうことです。

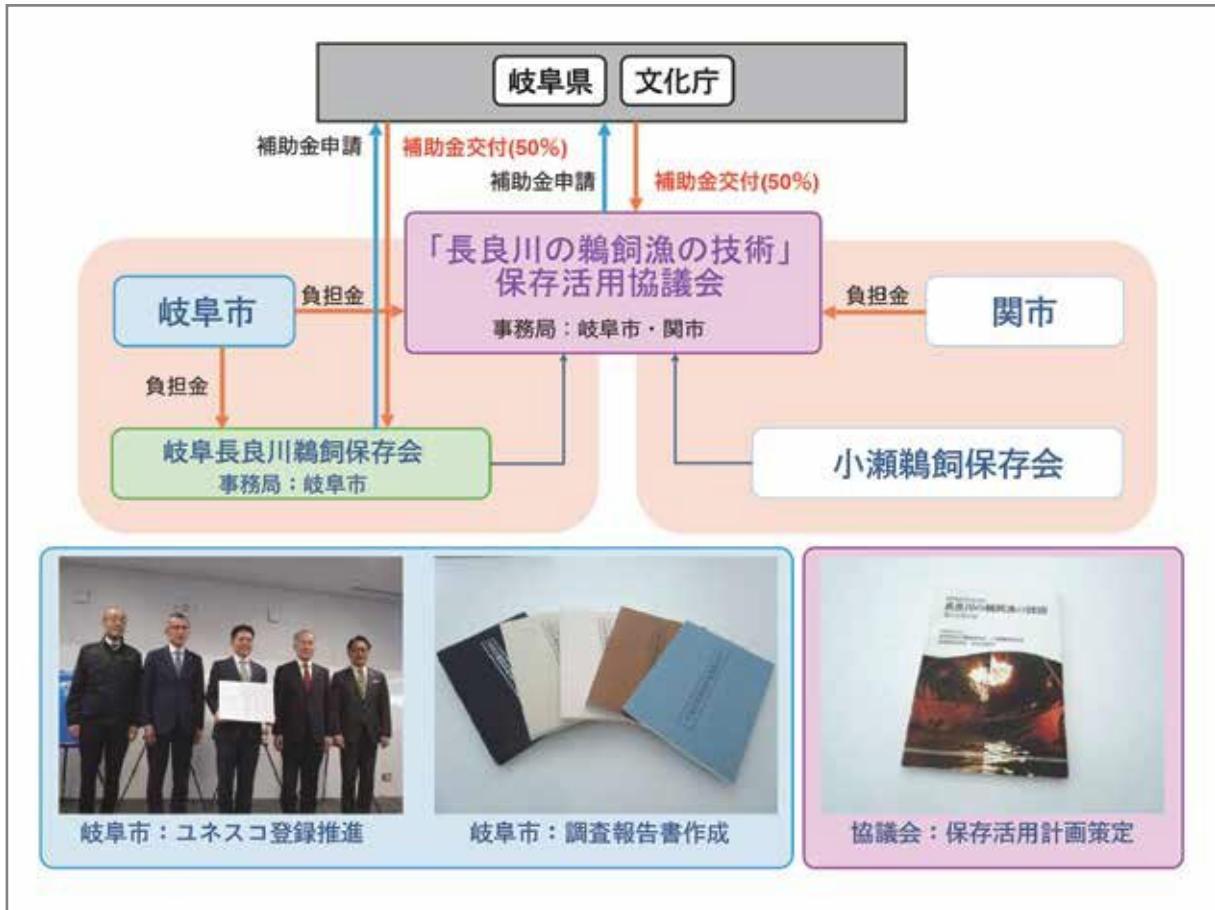
**久津輪：** 分かりました。この鶴舟造船の事業については、いつから始まってどのような状況かというのをざっと教えていただけますか。

**高橋：** 令和2年度に、岐阜市の観覧船を作っている市営造船所があるんですけども、そこの方をお願いして一度は作っていただいたんですが、あくまで観覧船を作る人達なので日常的な仕事にはできないということで、次の年からは鶴舟の船頭さんのシーズンオフの仕事としてできるように体制を整えてやるということで始めたのですが、場所がなくてですね。

先ほどお話があった通り、13メートルの長さがあるので非常に場所に苦慮しまして、最初の年は久津輪先生のお勤めになっておられる森林文化アカデミーの一角をお借りしてやらせていただいたと。で、その後は鶴匠さんのつながりのある旅館のオーナーのご厚意によって、建物の一階部分を借りて、写真にあるような造船場所をキープしたということで、3年目から本格スタートしたということで、今年は4艘目を作っているところですね。

**久津輪：** お金としては、文化庁から？ 建造費や、師匠の田尻さんの人件費や、船頭さんの人件費は、どこからどれぐらい出ているのですか？

**高橋：** 国の補助金がだいたい50%補助ですので、造船にかかる費用がだいたい500万円ですけども、材料費と人件費がほとんどというか、ほぼそれしかありません。国から250万、市から250万というような形でお金は賄っているところですが、でもアルバイトみたいな形で、時給でお支払いしています。



スライド10



スライド11



写真7 森林文化アカデミーに設けられた仮設舟大工小屋で鵜舟づくりに取り組む、今井翔佑さんたち鵜匠船頭

**久津輪：** 船頭さんたちに対して、アルバイトということですね。舟大工の田尻さんに対しては？

**高橋：** 時給ですね。観覧船の造船所があると先ほど言いましたが、その賃金単価を参考に考えさせていただいているので、あそこも実は時給換算になっておりますので、そういう計算になります。

**久津輪：** なるほど、分かりました。今までのところ、この進め方というのは順調に進んでいると言える感じですか？

**高橋：** そうですね。最初はちょっと場所のこともありますし、道具についてはまだ解決しきっていないと思うんですけど、造船をする工具そのものが手に入らないというか、いろいろなトラブルもありました。まあ結局、田尻さんがお持ちの道具を借りながらやっているという形になるんですけど、まあ4年目ということでみなさんの出来栄えといえますか、だいぶ慣れていらっしまったのかなと思っています。10年かかっても一人前になれるかどうかという世界なので、なかなか大変かなとは思っています。

**久津輪：** ありがとうございます。高橋さんのお話の中で複雑な所もあったと思うんですけど、鵜飼の舟には2種類あるというお話を先ほどしました。1つは観光客が乗る観覧船で、もう1つは鵜匠さんが乗る鵜舟ですね。観光客が乗る舟というのは、

もともと岐阜市が市直営の造船所を持っていて、そこに舟大工さんたちがいらっしやるんですけど、その観覧船の造り方というのはやや現代的なところもあって、木で造った後にFRPで全部覆ってしまい、長持ちさせる造り方をします。一方、鵜匠さんが乗る舟というのはもともとさっきお話したように民間の舟大工さんに注文して造ってもらっていたんですね。それは本当に伝統的な、昔ながらの木の舟の造り方をするわけです。その部分を残すために今回岐阜市さんで仕組みを作って、文化庁のお金も半分入れながら後継者育成を始めたということになるんですね。

2年目にはこれだけのスペースがないということで、森林文化アカデミーは岐阜市ではなく美濃市にあるんですけど、キャンパスが広いので、岐阜市から依頼があって、森林文化アカデミーに仮設の舟大工小屋を造って造船をすることになったんですね(写真7)。その数年前には今日来ていらっしやる東京文化財研究所の今石みぎわさんと森林文化アカデミーとの共同研究で1艘造り、その造船記録を動画と文書で残したという実績もあったんですね。

いま一番手前に写っているのが船頭さんの今井翔佑(しょうすけ)さんという、長良川に6人いる鵜匠の代表の所で働いている若い船頭さんです。今まではこの船頭さんというのは、鵜匠さんの家によって違いますが夏の間だけ雇用されていて、冬は全然違う仕事をするという船頭さんも多くいらっしまった



岐阜県長川鶴飼保存会事務局 五十川天士さん

んですね。だけど今、岐阜の鶴匠代表の方はこういう技術とか伝統をきちんと残すために船頭さんを通年雇用されていて、冬の間も鶴の世話とか、松明の準備だとか、そういう仕事をしていたんですけども、さらに一歩進めて舟を造るということも担ってもらおうということで、この3人の方たちがやっている。

森林文化アカデミーで造っていた時は、教員の部屋を出たらずぐの所でやっていたので、毎日とても興味深く拝見していて、翌年からは岐阜市に作業場を確保されました。

さて、では自己紹介も兼ねて、どういう経緯で五十川さんがこれに関わるようになったのか、話していただこうと思います。

**五十川：** 長くなるんですよ。もともと僕はこの鶴飼保存会の事務局をやっているんですけども、その前は宮大工の会社に働いていて、ちょうどコロナの時、友達から岐阜の舟大工さんがいなくなる可能性があるって聞いて。僕はたまたま宮大工の前に川下り、ラフティングというゴムボートに乗って激流を下っていくという仕事をやっていて、ちょっと川に親しみがある人間だったので、友達から話をいただいて食いついちゃって。

でも鶴飼っていう文化、もともと岐阜に住んでいたんですけど全然知らなくて。そういう木造船とかを見て、すごいカッコいいなと思っちゃったんですね。そこから会社の社長さんとも話し合いながら、舟大工もその会社の仕事と一緒にできないかという感じで進めていたんですけど、やっぱり会社もそこまでは

できないということになったので。

僕は単独で、鶴飼保存会がやっている造船事業に手弁当で通ってメモを取りながら、自分で舟を造れるようになりたいと思ってやっていたんですけど、やっぱり仕事との両立ができず、仕事を辞めますということになりました。そうしたら文化財保護課の方から声をかけていただいて、事務局員として働きながらだったら見習い舟大工としても迎えられる可能性が出てくるので、良かったらどうですかと声をかけていただいたので、チャンスと思って事務局員をやる流れになりました。

**久津輪：** 行政側では船頭さんを舟大工に育てるという事業を始めているのと同時に、民間側でもまちづくりグループの人たちが川舟を観光などに活かしたいという話があって、民間でも舟大工を育てていけないかという話し合いも行われていたんですね。それで五十川さんが民間側の中心人物だったんですね。私は当時両方知っていたので、官民連携会議をやりましょうよと言って、市役所の方と民間のまちづくりグループの方と、なるべく連携するように話し合いをしたりしました。

五十川さんは鶴匠さんの船頭ではないから、実際の鶴舟造船の作業には携われないのですが、ほぼ2年間ずっと見学でしたね(写真8)。

**五十川：** そうです。丸2年立ちっぱなしですし、触らせてもらえないんですけど、ずっと技術を盗んで見ているのを2年ぐらいやって、そうしたら市役所の高橋課長さんとか、その下にいらした鳥本さんが声をかけてくれました。今まで事務局員なんかやったことがなくて、パソコンもワードとかエクセルとか全然分からないんですけど、まあ頑張ってやっています。元々保存会のシステムは、前にレジェンドの事務局員の方がいて全部作ってくれていたもので、それに習って少しずつ仕事をしながらやっていくようになったんです。



写真8 鶴船造船を見て学ぶ五十川さん



写真9 NPO法人グリーンウッドワーク協会・竹部会が製作した鳥屋籠

**久津輪:** 今は五十川さんの主なお仕事は、こういう道具の調達なども？

**五十川:** そうです。もう全般ですね。

**久津輪:** この写真をちょっと説明していただいてもいいですか？(写真9)

**五十川:** これは鳥屋籠(とやかご)と言って、鶇が夜寝る所です。寝床です。森林文化アカデミー卒業生でNPO法人グリーンウッドワーク協会・竹部会の方が作っているんですけど、その方たちに作っていただいたものですね。今年度納品されたものです。

**久津輪:** こういうものもそれまでは鶇匠さんたちがバラバラに注文をされていたり、節約のためにほとんど注文されずに古い籠を使い続けている人もいましたね。

**五十川:** 籠をかじってしまう鶇がいるとポキンと折れて、そこから壊れていってしまう。結構消耗品ではありますね。

**久津輪:** 鶇籠を作る技術もやはり残していく必要があるということで、今は保存会がまとめて鶇匠さんの需要数を発注していただくようになって。そういうシステムがだんだんできてきたところですね。

**五十川:** だいぶんできた状況ですね。

**久津輪:** これも鶇飼に使う道具ですね？(写真10)

**五十川:** そうです。これは篝(かがり)と言って、松明がぶら下がっている所の一式です。これも特に左側の火袋という所は松明をががん入れていくので、1年後には変形してしまうぐらい消耗が激しい。それでも毎年作っていただける鍛冶屋さんが県内に1人しかみえないので、保存会としては今後の育



写真10 船首に取り付ける篝(かがり)

成も考えつつやっているという状況です。

**久津輪:** 技の環としても鍛冶屋さんの紹介などをお手伝いしながらやっているという状況です。

**久津輪:** この写真の説明もお願いします。(写真11,12)

**五十川:** 木造船を造る材料のコヤマキという木材でして、これは長良川の舟に特有の材ですかね。

**久津輪:** この地区だけですな。

**五十川:** 全国的にスギばかりですね。この辺りはコヤマキが昔から使われているので、木材をどこから調達しなければいけないんです。コヤマキは昔風呂桶とかに使われていて、それを舟にも使っているんで探さないといけないのですが、天然木なのでなかなか見つからない。山の頂上あたりにあるらしいので、山を切り開いた時にあったねということを取ってくるらしいのですが、探してもらおう業者からなかなか見つからなくて、僕が保存会に入った時には業者との連携は取れていたの、田尻さんに何の材料が必要かを聞いて、それを業者に頼むという流れで、いまは供給ができるようにはなっています。

木材自体も舟の材料として使うには乾燥に3年かかるので、3年間野ざらしにして。田尻さんの先生的那須さんいわく、野ざらしにすることで割れが出たり腐れが出たりひねりが出たりとか、アラを出してから適材適所に木材を使っていくという流れがあるのですが、保存会としては木材を管理していくのがなかなか難しい。平積みにして置いておくことしかできないところもあるのですが、木材としては供給できるシステムは整っている。昔から考えている価値観と、今できることできないことはあるので、そのバランスが難しいとは思いますが。

**久津輪:** コヤマキについて横井さんから補足をお願いし



写真11 鵜舟に使われるコウヤマキ

ます。横井秀一さんは森林文化アカデミーの元教授で、樹木の専門家です。

**横井：** コウヤマキは岐阜県にちょこちょこと天然分布しています。どんな場所にあるかという、暖温帯と冷温帯、シイ・カシが生える所とブナが生える所の間ゾーン、中間温帯と言わんでも、中間温帯に属する地域の、ちょっと痩せたポトゾルという特殊な土壌が出るような立地の所にポツンポツンと分布しています。具体的に言うと旧下呂市、郡上市の美並の辺り、どちらも横に並んでいる中間温帯になるんですけども、そういう地域の山頂付近、それも尖った山頂ではなくてなだらかな山頂の周辺に天然分布しているんです。そういう特殊な



写真12 コウヤマキの製材

立地に生育する種なのですが、岐阜県内にそういう場所があります。なかなかこれだけの太さの木というのは少ないですけども。

**久津輪：** 生育が遅いということですね？

**横井：** 生育はそれほど早くはないですね。割とレアと言っている木だと思います。





写真13 3月上旬の造船作業の様子 右奥でカメラを構えるのが五十川さん

**久津輪：** それで、これが先週撮影した船頭さんたちが作業をされている様子です(写真13)。鶺鴒のシーズンは5月11日から10月15日までなんですけれども、11月からこの造船作業が始まって、3月までに1艘を完成させるという、それを毎年繰り返していくということですね。五十川さんは奥に写っていますが、こうやって定期的に現場を見てはスケジュール管理をしたりとか、田尻さんにも？

**五十川：** そうそう、田尻さんの尻を叩いたりとか(笑)。納期が迫ってるんですと。昔は那須さんがすごく厳しい方だったので、今見てもヒイヒイという感じなので、田尻さんは昔はやっぱりそれで苦労をされているので、今の子達にはそんなに厳しくもなく、でもちゃんと言わない所は言わなきゃいけない。伝えないといけない所は伝えたりするんですけども、そういううまいことを多分、雰囲気良くしながら育成事業をやっていたので、そういう意味ではなかなか良いんじゃないかなと思います。

**久津輪：** ありがとうございます。舟を造るスピードもだいぶ早くなってきたそうですね。

**五十川：** 周りの見習い舟大工さんがやれることも増えてきた

ということですね。今までは教えながら自分も造らないといけないとなると、やっぱりどうしても時間が足りないということになっていたんですけど、今年は余裕で終わるような流れになってきている。今年度は来週の月曜日に完成予定で、ほぼ完成はしているんですけど、後は舟の細かな修正とか、付属品をみなさん一緒に作っていただいている状況です。

**久津輪：** 10年ほど前に、舟大工の技術伝承みたいのことを考えていた時に、当時舟大工さんに聞いたら「いやわたらの時は需要がいくらでもあったから、年に何十艘も造った、それで技術を覚えた。だけど今はそんな需要がないでしょう。その年に1艘造れるかどうかで、その技術が覚えられるはずがない。だからもう今からでは無理だ」というお話をよくされたんですね。

だけど、このシステムは本当にとても良い合理的なシステムだと思っていて、舟を操る船頭さんがオフシーズンに自分の舟を含めて造るというのは、ある意味、舟を一番分かっている人が造ったり修理したりする仕組みができるということなんです。しかも公的に継続的な需要を作るというのは、本当に岐阜市と鶺鴒保存会の皆さん、鶺鴒さんたちは、よく考えられたなと思いました。すごいと思っているところです。こういう仕組みができなかったら、本当にこの舟大工の技術は絶えている可能性も

高かったと思うんですね。

だからここは産業としての支え方とはちょっと違います。文化財なので、無形文化財としての技術をどう支えるかという、やっぱり行政の割合、行政が考えなければいけない割合がちょっと高くなるんじゃないかなと思いますね。

**五十川：** 船頭さんはやはり冬の間はそういう道具を作ったりするので、手先が器用な方が多かったです。というのも良かったんじゃないかなと思います。

**久津輪：** ところで実はこの写真、右側が五十川さんなんですけど(写真14)、何と、鶺鴒保存会の事務局として働いていたから船頭にならないかと声をかけられて、鶺鴒匠の船頭にもなりました？

**五十川：** なってしまったんです。と言っていいのかわからないですけど。

**久津輪：** 修業は厳しかったそうですね？

**五十川：** そうですね。1年目というか僕は途中から船頭に、まあ運良くなれたんですけども、全く知らない世界なので、鶺鴒匠代表の杉山雅彦さんという、保存会長でもある方に2ヵ月間しごいてもらいました。

**久津輪：** 語り始めると泣きそうになっちゃいますね……。

**五十川：** そういうわけじゃないですけど(笑)、それがあって、去年1年、ワンシーズンを終えることができたんですけど。僕がやっているポジションは舟の一番後ろで先導をするという、要は鶺鴒の世界では一応船長みたいなところを、いきなり僕がやっている。何も分からないで船長をやっているんですけども、いろいろ苦勞をしているという状況です。

**久津輪：** 今後、事務局としてやりつつ、鶺鴒匠の船頭もやりつつ、今後は舟大工の仕事も？

**五十川：** 今後、できればいいと思っていますけど。まだどうなるかわかりませんが。まあちょっとずつ、貢献できればいいと思っています。

**久津輪：** 五十川さんのように現場を知っている人が中間に入っている。舟大工さんと見習いの方たちと行政との間に入って周りを調整しているというのはとても良い状態だなと思いますね。ぜひ船頭としても、一流の船頭さんに。

**五十川：** なりたいですね。



写真14 鶺鴒匠の船頭として働く五十川さん(右)



#### <質疑応答>

**久津輪：** 時間を少し過ぎてしまいましたが、飛騨木彫と鶴飼の舟大工、工芸品と文化財の後継者育成についてのお話をご報告させていただきました。ここから質疑応答です。では東京文化財研究所の今石さん。

**今石：** すばらしいことだなと。2017年に私が鶴舟の造船技術の記録プロジェクトに参加した時は、本当にどうしようという感じだったと思うんですけど、それからよくここまで、すごいなと本当に思っています。質問なんですけど、文化庁の補助事業で出しているということなんですけど、いつまで補助がついて、その後はどうされるのかということをお伺いしたいです。

**高橋：** 6年間造った後は、できれば関市の小瀬鶴飼の舟を3艘造って、可能であればまた長良の舟を6艘造り直してという循環ができれば、途切れることなく永続的に仕事ができますので、補助金の期限を切られてはいませんので、そういうサイクルで今後もずっとやっていければなと思っております。まだ確実ではないんですけど、その方向で今はできているかなと思います。

**今石：** すばらしいです。



東京文化財研究所無形文化遺産部 主任研究員 今石みぎわさん

**久津輪：** これも本当に懸念していたことなんですが、鶺鴒は岐阜市と関市でやっていて、岐阜市に6人、関市に3人、鶺鴒さんがいるんですね。ですが観光客の規模とか財政の規模では岐阜市の方がずっと大きくて、関市は小さい。それで岐阜市の舟を更新していった後、関市の舟はどうするんだろうというのはずっと心配だったんですけども、岐阜市の高橋課長さんをはじめとする文化財保護課のみなさんと、関市文化課のみなさんと、多分相当連携の協議をされたんだと思いますが、こうやって岐阜市の船頭さんたちが今後関市の舟も造っていくという仕組みを回そうとしているのは素晴らしいですね。

**久津輪：** 他に質問はありますか。では横井さんお願いします。

**横井：** ちょうど今、鶺鴒の話になっているので、日本ラインの木曾川の鶺鴒、船着き場が愛知県側になるので、岐阜県とは直接関係はないかもしれませんが、同じ鶺鴒をやっているで、事情や状況を把握されていたら教えてください。

**久津輪：** 木曾川の鶺鴒は、犬山市の職員が鶺鴒をやっていて、道具も自分たちで作ろうということになっています。鶺鴒籠に関しては、もう何年も前に美濃市で鶺鴒籠を作っている森林文化アカデミーの卒業生たちのところに鶺鴒さんが自ら鶺鴒籠作りを習いにこられて、鶺鴒籠づくりの技術はもう習得されました。だから鶺鴒籠は自分たちで作っています。舟に関しては、もともと木曾川に舟大工さんがいらして、木曾川鶺鴒の舟は木曾川で造っていたんですけど、もうその方は亡くなられたので、一度鶺鴒さんたちで舟を造るというのはチャレンジされています。それで造った舟もあります。ただ、その後は毎年造っているという話は聞いていなくて、多分、FRPを張って古い舟をなるべく持たせるといった形でやっていると思います。

鶺鴒に関する道具、舟大工の造船技術とか鶺鴒籠を造る技術というのは、やはり一番大きな鶺鴒の地である岐阜市と関市が責任を持って技術を継承して、全国に11か所ある鶺鴒地の道具もきちんと作っていけるようにするという、そういうことを目指していくべきではないかと思いますね。

**久津輪：** それでは少し時間を過ぎましたので、これで座談会を終らせていただきます。本当にたくさんの方々に集まっていたいただいて、中身の濃い議論ができたと思います。ありがとうございました。



造林技術研究所 代表 横井秀一さん



2024年度 岐阜県委託事業

「匠の国ぎふ」の技を支える相談事業 年次報告書

「伝統技術の後継者を育てる仕組みづくり」座談会記録

2025年8月発行

一般社団法人 技の環  
岐阜県

執筆・編集:

久津輪 雅  
村田 明宏  
蓑谷 百合子  
大滝 絢香

デザインディレクション:

kongcong

表紙・フォーマットデザイン:

長尾訓寿

© 技の環 本報告書の無断転載、複製、複写(コピー)、翻訳を禁じます。